—U7— ～海上の戦乙女たち～

堅物サンチェリオ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

未知の敵、深海棲艦と戦って敗れて去った青年は、赤い巨人に助けられる。赤い巨人と一心同体となり人類の希望、艦娘達と共に深海棲艦に立ち向かう。

目次

プロローグ ―― 1
1話　その名はセブン 1 ―― 4
1話　その名はセブン 2 ―― 11
1話　その名はセブン 3 ―― 23
1話　その名はセブン 4 ―― 34
1話　その名はセブン 5 ―― 45
1話　その名はセブン 6 ―― 53
1話　その名はセブン 7 ―― 63
1話　その名はセブン 8 ―― 73

プロローグ

２０ＸＸ　０７／０７　夜

そこは暗い暗い海の中、一人の青年は只々冷たい海中を漂うばかり。海面では誰かが戦っているのか、時折激しい光と爆音が海中まで届いていた。だがそれも気にならなくなっていた。青年は、たった今まで何かと戦っていたのだろう、心も体もボロボロになっていた。手足を動かそうとするがうまく動いてくれない・・・。青年の体はどんどん海面から遠ざかっていく。

青年（くぅ・・・、動かねぇ・・・）

それでも青年は生きようと必死にもがく。だが無情にも彼の意識は奪われていく。

青年（・・・すんません、艦長・・・）

彼は心の中で嘆いていた。自分の無力さに。敵に手も足も出ず、恩師への謝罪の言葉を述べながら沈んでいく、自分の無力さに。

青年（守れたのか・・・な？俺は・・・、わかんねぇや・・・）

何かを守る為に必死に戦った彼の命は、今にも尽きようとしている。

彼をそうなるまで追い込んだ者は・・・、海上に浮かぶ正体不明の兵器、生命体とでも言うのだろうか、現代の兵器では全く歯が立たない、ただ無差別に船を沈めていく存在、人はそれを「深海棲艦」と呼んだ。それが現れてから何年もしない内に、世界は制海権を奪われた。〝深海棲艦〟に。敵う相手ではない、そんなことは分かっている。だが、退くわけにはいかない。守りたいものがあったからだ。倒すことはできないが時間を稼ぐぐらいはできる。

〝アイツ〟らが来るまでは。

自分が囮になってヤツらの気をひこう、そうすれば、皆が逃げる隙ができるかもしれない。彼は皆を守りたい、ただその一心で、深海棲艦に立ち向かい、敗れ、沈められた。

青年（ん・・・、あれは・・・）

失いつつある意識の中で、遠くからこちらに来る６つの影が見え

た。６つの影は、彼が守ろうとした存在、仲間が乗る船を囲むように展開する。
彼は確信し、そして安堵した。　　〝アイツ〟らだ。
青年（艦・・・娘・・・か・・・）
「艦娘」、それは、現代の兵器が通用しない無敵の深海棲艦に対して有効打を与えられる、唯一の存在。見た目はただの女の子だが、世界対戦で沈んだ戦艦たちの魂を具現化した人型兵器らしい。女の子にはあまり似合うとは思えない大砲や魚雷を装備し勇敢に敵と対峙する。
その姿は、幼い子供の容姿から色気ムンムンのお姉さんまでと何でもござれ・・・。
海☆軍☆大☆歓☆喜。
・・・とにかく、艦娘が来てくれたならもう大丈夫だろう。仲間はこれで助かる、自分のようにならなくてすむのだ。彼の動きが止まった・・・、もう自分の役目は終わりだと言うかのように・・・。
青年（皆・・・元気で・・・俺は・・・先に・・・逝くよ・・・どう・・か・・・生き・・て）
青年はゆっくりと目を閉じた・・・・・その時、
――――死んでは駄目だ――――
突如、巨大な光が青年を覆った。その光は、まるで巨大な手のように青年を優しく包み込む。そして・・・、
青年は、巨大な光と共に夜空に消えてしまった・・・。
・
・
・
青年（うぅ・・・、ここは・・・？）
そこは紅い光に満ちていた。焼けるような熱さではなく、人肌に近い、そんな暖かさを感じる不思議な空間。その空間に青年は横にされてフワフワと浮かんでいた。
青年（あぁ・・・、ここが死後のセカ［――――青年よ・・・――――］・・・ん？）

青年は声の方へ視線をやると・・・・・巨人・・・赤い巨人がいた。
銀色に輝き鋼鉄のように硬そうな顔。その頭上には鋭利に尖ったトサカのような物があり、まるで大昔、何処かの国の騎士が身につける兜の様だった。巨人の額には、緑色の球体が埋め込められておりピコン・ピコンと、点滅を繰り返す。そして何よりも、あの激しく燃える火のような真っ赤な身体に思わず目を引く。
青年（あれ？・・・どこかで・・・）
青年は赤い巨人に見覚えがあった。そうだ、あの時、突然目の前に現れて、まるで自分たちを守るかのように戦っていた、あの巨人。まさに命の恩人である。・・・・・自分は死んだけど。
青年（幻・・・かな？・・・けど、このまま天国に行くんだ、行く前に礼ぐらい言わないとな・・・幻でも）
青年は巨人の方へ顔を向けた。礼を述べようと口を開く。
だが、青年は気付いていなかった。いや、気付けなかった。赤い巨人の顔は鉄のように硬い、表情もほとんど変わらない。無表情だ。
そんな無表情の巨人は・・・激しく怒っていた。黄色に光っている目を一層輝かせ、腕を組んで青年をじっと見ていた。
青年「あの・・・さっきはありが［――ってに・・・――］・・・え？」
???「――勝手に満足して死ぬヤツがあるかぁぁぁぁ!!!!!（、凵、＃）――」
突然の怒号、　青年は只々、
青年「・・・・・・ウゥオぇ!?Σ（、□、；）」
・・・驚愕。
これが、青年と・・・Ｍ７８星雲から来た赤い巨人が地球上初めての接触した、歴史的瞬間であった。

1話　その名はセブン　1

２０ＸＸ　夏　早朝

そこには、海沿いに広がる一際大きい軍事施設があった。対深海棲艦の為、元々そこにあった小さな港を大改装、また増設して、今では人類の希望と呼ばれる〝艦娘〟達の居住場所になっている。

第５前線鎮守府〝アマギ〟である。

そのアマギ鎮守府の執務室でせっせと勤務しているのが、鎮守府の長、キリヤマ。そして、キリヤマの横で秘書艦を勤める、巫女服のような服と知的な眼鏡が印象的な女性が〝高速戦艦〟霧島である。

霧島「提督？現時刻、０７：００です。総員起こし、致しましょうか？」

キリヤマ「ん～？もうこんな時間か。そうだな、頼む」

霧島「了解しました！」

霧島は、机の隅にある無線機を手に取る。

霧島「マイク音量、大丈夫？チェック！ワン・ツー！・・・よし！」

軽快に無線機の点検をする霧島、・・・そして、

霧島「みなさーん！おはようございます！秘書艦の霧島です♪

総員!!直ちに起床!!　　艦隊に所属する艦娘は、朝食を済ませ、０８００には、鎮守府内で勤務を始められるよう、しっかり準備お願いしますね♪　繰り返します！艦隊に所属する艦娘は・・・」

楽しそうにアナウンスする霧島を見て、

キリヤマ（ホントなんだろう・・、前線基地の総員起こしとは、とても思えないな・・・）

と、苦笑する。霧島は、普段キッチリと仕事をこなしてくれる心強い存在なのだが、こうした事は少しだけ抜けているところがあった。

キリヤマ「まぁ、そういう所が、愛嬌というか、可愛い所というか・・・フフッ」

霧島に聞こえない様につぶやく。そして、視線を霧島から窓の外へと向けた。

大改装をした鎮守府は、大きな建物が至るところにあった。執務室のある提督棟は勿論、改装・開発を行う工廠、艦娘達が戦いの傷を癒す入渠ドック、訓練等をする為の多目的演習施設、腹が減っては戦は出来ぬ艦娘達の補給線アマギ大食堂、スイーツが欲しい！お年頃の艦娘達、憩いの場　甘味処間宮ｅｔｃ．ｅｔｃ．．．、様々な艦娘の為の施設が建てられていた。

だが、キリヤマはそれらの施設ではなく、正門付近を見ていた。

鎮守府の正門は、内陸から来る客人を迎える為に作られた。その正門の横には、最近新しく作られた建物があった。鎮守府内の施設とは、かなり見劣りするほど、人が2、3人住める程の鉄筋コンクリート製の小さな建物である。

その中から、提督とはまた違った制服を着た一人の青年が出てきた。作業服のような制服を着た青年は、正門付近で何らかの作業を始めていた。

キリヤマ「お？アイツも動き出したな？」

霧島「もう・・・提督ったら、あの人は、珍しい野生動物とかではないですよ？」

いつの間にか、総員起こしの放送を終えた霧島が、キリヤマの直ぐ後ろに立っていた。

キリヤマ「違う、違う、アイツも最近仕事に慣れてきたなと思ってな」

霧島「あぁ、確かに・・・、最初はよく失敗してましたっけ？最近はそんなことも無くなって、大変良くなったと思いますよ？」

キリヤマ「フフッ・・・そうだな、最初から飲み込みの早い男だったからな・・・」

まるで自分の事の様に嬉しそうに話すキリヤマ、霧島は、そんな提督の姿に苦笑を浮かべながら、正門にいる青年に視線を向けた。

霧島「〝ナガト・リョウ〟・・・、あの人が来て、ほぼ1ヶ月ですか」

キリヤマ「そうだな・・・、あれから、もう1ヶ月か・・・」

〝長門　亮〟青年は、そう呼ばれていた。

ナガトは、元は海上保安の隊員だった。だが、あの七夕の夜、大型輸送船の護衛任務の途中、突如現れた深海棲艦と交戦、強敵相手に善戦するもの、敵の激しい砲撃に見舞われて、乗っていた護衛艦が大爆発、彼は爆発に巻き込まれ、一時行方不明になる。誰もが彼の死を覚悟した。だが彼は、爆発現場から少し離れた、人気のない小さな砂浜に打ち上げられていた。あれほどの爆発に巻き込まれたにも関わらず、彼は、海水を飲んで衰弱はしていたが、他は軽い火傷と打撲程度で済んでいた。まさに、―奇跡―だった。そして、不幸中の幸いか、打ち上げられた場所が、〝アマギ鎮守府〟の近くであった為、キリヤマ提督が、彼を保護し、今に至る。

霧島「今でも信じられません。あの爆発に巻き込まれた人が、あんなピンピンしているなんて、今ではこの鎮守府の警備員ですよ?」

キリヤマ「確かに、1週間もしないで退院したからな。アイツの回復力には驚くばかりだよ」

霧島「鎮守府内では、ここ最近まで〝ミラクル☆メーン〟って呼ばれてたそうですよ?」

キリヤマ「フフッ・・・初耳だな?誰が考えたんだ?」

霧島「金剛お姉様です。最近は言われなくなりましたけど」

キリヤマ「金剛かぁ・・・」

英国生まれのアイツなら言いそうだ、そう思っていると正門から、噂の大きな声が、

金剛「ＨＥＹ！Ｍｉｒａｃｌｅ☆ｍｅｅｅｅｎ!!おはようございマース!!」

金剛型一番艦〝金剛〟が正門を通っているところだった。その後ろから、比叡、榛名と、金剛型の姉妹が続く。秘書艦の霧島も、金剛型四番艦である。

キリヤマ「・・・メッチャ言ってるぞ?」

霧島「あれぇ?私の分析では・・・、またブーム来ちゃったかな（ボソッ）?」

キリヤマ「ブームって・・・フフッ」

霧島「と、とにかく!あの人は、おかしいんです!あの方と同じ名

前だから、かなりの強運設定されてるんじゃないでしょうか!?」
キリヤマ「せ、設定？」
霧島「そうです！あれで生きてるのですから！そりゃあもうあの人に、戦艦長門の念やら魂やらが・・・」
霧島は、完全に墓穴を掘った。
???「おい霧島、私はまだ生きているぞ？」
霧島が、バッと振り向いた視線の先には、一人の艦娘が仁王立ちしていた。霧島は目を見開いた。
霧島「ナ、長門秘書艦・・・!?」
――戦艦〝長門〟――
かの、有名な戦艦の一隻。第二次世界大戦で、日本海軍の総旗艦を務め、大戦終結まで戦い抜き、壮絶な最期を遂げた大戦艦。
そんな長門は、艦娘として生まれ変わり、アマギ鎮守府で秘書艦を務めていた。昨日は非番の為、霧島に勤務を託していたのだ。
長門「全く、私が休んでいる間、秘書艦を務めてくれたお前に、一言礼を述べようと思っていたのだが・・・」
霧島「えぇ!?何時からそこに!?」
長門「ついさっきだ。ちょっと早めに来てみたら、私の悪運がどうだ、怨念がどうだとか・・・」
霧島「そそそ、そんなことは、言ってません!!警備員さんの事を言ってただけで、決して長門秘書艦の事では・・・」
長門「同じではないか!!・・・霧島、お前は私のことを、そんなふうに思っていたのか？・・・・・信じていたのに・・・くっ!!」
長門は俯く。それを見て霧島は目を白黒させる。
霧島「ごごご、誤解ですぅ!!許してくださーい！」
長門「・・・フフフッ、なーんてな、冗談だ」
霧島「え？」
長門「戦艦長門は、あれぐらいで怒ったりはしないぞ？お前もよくわかってるだろ？」
霧島「・・・・・・も、も、も、もう!!ひどいです！」
長門「ハハハッ、すまんすまん。提督と楽しそうに話していたから

な、少しからかってしまった。許せ」
霧島「わかるわけないですよ！もー・・・」
長門「そうか？提督は、分かっていたぞ。なぁ提督？」
霧島「え？ウソッ!?」
二人は、提督に視線を向ける。
キリヤマ「・・・随分、上手くなったな、長門」
霧島「・・・本当に、分かってたんですか？提督？」
長門「そう言うな、霧島、秘書艦という者、提督のプライドを尊重する事も、大切な仕事だ」
霧島「な～るほど～、勉強になります！長門秘書艦!!」
長門「今、秘書艦は私ではなくお前だ。その呼び方は間違っているぞ？」
霧島「！、失礼しました！長門さん！」
長門「うむ」
キリヤマ「あの～、もうよろしいか？」
キリヤマが二人の会話を妨げる。時計を見たら０７：５０になろうとしていた。
キリヤマ「０８：００なっても、執務室が仕事始めていなかったら駄目だろ？やることはやらないとな」
長門「・・・そうだな。すまん」
霧島「私としたことが・・・、すみません」
キリヤマ「別にいいさ。さぁ、始めよう」
キリヤマは、その場から立ち上がる。
霧島、長門は、提督の机を挟んだ位置に立った。
霧島「気をつけ!!」　ザッ！
霧島「キリヤマ少将に対し・・・敬礼!!」　ザッ！
朝の日課、朝礼が行われる。１０分程の短い朝礼。艦娘だらけの鎮守府で、唯一海軍らしさが出るところ。昔は３０分程はやっていた朝礼は、日を重ねる毎に、段々短くなっていった。もう、止めていいんじゃないか、艦娘からは、そんな言葉もあった。だが、キリヤマは、
キリヤマ「昔、君達に乗って戦った海軍が、規律と誇りを守る為に、

行った訓練の一つだ。今、海軍である我らが、これを本当に止めてしまったら、もう我らは海軍ではない」
　これを聞いた艦娘は、二度止めようとは言わなかった。
　キリヤマは、この仕事に誇りを感じている。だが、時代は変わっていく、今までのやり方では、収まりきらない所まで来ている。
　深海棲艦が、いい例だ。現代の兵器では通用しない、今までの経験が全て無駄だったのではないか、そう思わせる程の破壊力。そこに、人類の希望として現れたのが、艦娘達だった。だが、操縦席もない、自分で思考し戦う人型兵器、初め艦娘は人々から怖れられた。だが、艦娘達は、深海棲艦から制海権の一部を取り戻した。深海棲艦と渡り合える事を証明した艦娘は、人々から信頼を勝ち取る。
　そうして、今となっては、艦娘が海軍の最強の矛と盾となり、海軍の殆どが艦娘を所有している。
　時代は変わった。キリヤマは、そんな時代の流れに、せめて、これは欠かさずやろう。そう決めて、今日も朝礼を行う。これが、時代の流れに少しでも逆らおうとする、キリヤマ自身の、意地、プライドの表れだった。
　霧島「・・・以上で、報告を終わります。提督、指示事項等お願いいたします」
　キリヤマ「うむ、霧島、ご苦労だった」
　霧島「はい！」
　キリヤマ「では、これより辞令を言い渡す！」
　キリヤマ「現時刻を以て、戦艦　霧島は、提督補佐、第一艦隊旗艦の任を解く！及び、戦艦　長門！」
　長門「ハッ!!」
　キリヤマ「現時刻を以て、戦艦　長門は、提督補佐、第一艦隊旗艦の任を命ず！・・・霧島、ご苦労様だったな、ゆっくり休め」
　霧島「はい！お心遣いありがとうございます！」
　キリヤマ「長門、引き続き頼む」
　長門「了解した」
　キリヤマ「では、海の平和を目指し、今日もよろしく頼む！以上！」

長門・霧島「了解!!」
朝礼が終了し、三人は、それぞれの持ち場に着く。長門と霧島は、秘書艦の引き継ぎを、提督は変わらず書類整理を、各々が持ち場に着いたとき、時計は、０８：００を指していた。
時間通りに、アマギ鎮守府全体が動き出した。これより一日が始まる。
だが、この一日が、壮絶な出来事の始まりになるとは、誰も知るよしもない。

1話　その名はセブン　2

２０ＸＸ　夏　朝０７：５０

鎮守府の玄関口にあたる正門、そこを通る人は、正直少ない。外部からの客人、艦娘、後は限られた納品業者ぐらいだ。

制海権を奪われていた頃、全ての支給は、陸路を使っていた。だが、限られた道しか通れない車での輸送は、積める数も限られ、一回の支給に複数台のトラックを使わなければならなかった。当然、燃料費・人件費が馬鹿にならず、その頃の鎮守府のお財布事情は大変苦しかった。それを艦娘達が制海権を確保したことで　、海路が開き、トラック数十台分の支給が輸送船一隻に収まり、輸送コストが大幅に減らすことに成功　。今では、ほとんどの支給は海からやって来る。正門から来るとしたら、正門付近ある自販機に補給しに来る業者や宅配便や郵便くらいだ。また外部からの客人も限られる為ほとんど来ない。唯一、多く通るだろう艦娘達も、０８：００までには鎮守府内で業務を始める為、それ以降の出入りがなくなる。

そんな正門の警備を任されているのが、変わった制服を着た警備員、ナガト・リョウである。

彼の制服は他とは異なる、キリヤマ提督が考案し、〝工作艦　明石〟が製作した物で、動きやすい方がいいだろうと、帽子は、アマギ鎮守府のロゴが付いたキャップに、上下は、軽装を重視した物になった。その姿は、さながら特撮に出てくる防衛隊の格好に似ている為、鎮守府付近に住んでいるお子様達に人気だった。

ナガト「えー、もうほとんど入ったよなぁ・・・」

秘書艦から渡されている名簿を確認する。

ナガト「長門型２人、金剛型は霧島さん除いて３人、扶桑型も２人、後は・・・、」

艦娘の出席確認。これも彼の仕事の一つである。

鎮守府から少し離れた場所に専用の寮が作られており艦娘達はそこで生活している。

大勢の艦娘を持つ鎮守府は、普通、鎮守府内に居住区を作る。だが、

アマギ鎮守府は、他の施設を先に大きく作ってしまった為、居住区が入らなくなってしまった。大本営は急遽、鎮守府付近あった土地一帯を買い取り、一帯に居住区を作って解決しようとしたが、付近の民間が猛反対。仕方なく土地の一部を買い取り、そこに寮を建設する。離れた場所に出来てしまった寮に艦娘を入れてしまう為、艦娘の動向が分からなくなる事を恐れた大本営は、キリヤマ提督に寮内の徹底管理を命じた。

しかし、大本営の厳命に対しキリヤマは、

キリヤマ『艦娘達が何する訳でもないのに、プライベートまで徹底管理するのは、それこそ反感を買ってしまうでしょう。別に疑いがない内は、遅刻、欠員の有無を付けるくらいに。必ず正門から入るよう徹底しておけば、漏らす事はないかと』

一部からは、甘過ぎる！という指摘もあったが、大本営は、自身のミスでこのような結果なった為、強く言えず、寮の事はキリヤマに一任するという形になった。

一任されたキリヤマは、最初、艦娘達が来る０７：００～０８：００の間は、秘書艦を正門前に立たせ、出席確認をとる形をとった。

だが、秘書艦にも他の仕事がある。そこで白羽の矢がたったのが警備員である。そして運命的にナガト・リョウが現れた。

キリヤマ『遅刻、欠員の有無を正門で確認する。簡単な仕事だ。他の仕事も増えるかもしれないが、少しでも秘書艦の負担を軽くしてやりたい。引き受けてくれないだろうか？』

ナガトは、「命の恩人である貴方の頼みなら」と、快く引き受けた。

そして、今に至る。

ナガト「飛鷹型が１人と、あ、同型の大酒飲み１人。後は・・・あっ」

０７：５９、・・・・そろそろ門を閉めようか。あと駆逐艦が４人来てないのだが、・・・遅刻するのが悪い。秘書艦の説教が待っているぞ。恐らく長門さんに変わっているはず、あの人は怖い、そして長い、説教が。だが諦めてくれ。これが現実だ。涙を飲んで、心を鬼にして・・・・・・ハイ、ガラガラガラ～。

ナガトは門を閉め始めた、その時、

???「その門、ちょっと待ったぁぁぁぁ!!!」
背後から声が聞こえる。・・・・・やっと来たか。
ナガト「こらぁ、遅いじゃないか～。早よぉ入れ～」
白露型の女の子４人が走って来ていた。白露、村雨、夕立、時雨の順に、
白露「あぁ、警備さん!!待ってくれてる‼ほら、皆走って！」
村雨「もう十分走ってるわよ～」
夕立「ふぇ～、もう限界っぽ～い・・・」
時雨「夕立が二度寝したからだよ?自業自得さ。ほら、あと少しだ」
白露型達が閉まりかけの正門を通る。

白露「私、いっちばーん！」
ナガト「・・・ビリだけどな」
村雨「はいはーい、おはよ～ございま～す」
ナガト「あ～い、おはよう」
夕立「もう、無理・・・ぽい」
ナガト「ほら夕立、頑張れ頑張れ」
時雨「おはよ、警備さん」
ナガト「おう、おはよ」
そして、全員が通ると、・・・ガラガラガラ、ガシャン！
ナガト「お前ら～、次遅れたら、即あの人の説教行きだぞ～！気をつけろよ～」
白露型４人「はーーーい！（ぽーい・・・）」
ナガト「・・・わかってんのか?・・・あれ・・・」
時間を見た。０８：０１を指していた。
ナガト「・・・・・・えー０８００、勤務中７人を除く、全艦娘の出席を確認・・・っと、これでよし！」
朝の仕事が終わった。ナガトは、名簿を提出するため執務室に向かった。
その途中、提督棟から出てくる一人の影が見えた。
ナガト「霧島さん、お疲れ様です」

霧島「あら、警備さん。お疲れ様です♪今から執務室に？」
ナガト「はい、名簿の提出と報告に。霧島さんは、今から仮眠ですか？」
霧島「はい、先に朝食を済ましてから少し仮眠して、それから金剛お姉様の所に行こうかと♪」
ナガト「ほへ～！非番だから、寮でゆっくりされたらいいのに・・・」
霧島「フフフ、それもそうなんですが、寮に一人で居ると手持ちぶさたで・・・、お姉様の所に行った方が落ち着くんです。お世話も出来るし」
休日をもらっても尚、自分の姉の身の回りの世話をするのか。良くできた妹さんだ。感心するナガト。
霧島「それはそうと・・・、勤務開始ギリギリの時、正門付近が、やけに騒がしかったのですが・・・何かあったんですか？」
メガネを中指でクイッと上げる霧島。少し目が怖い。
ナガト「うぇ!?、そ、そうですか？イヤ、特に問題はなかったはずですよ!?・・・多分」
霧島「ふ～ん、そうですかぁ・・・？結構聞こえてましたよぉ？駆逐艦４隻程。恐らく白露型の子達でしたねぇ？か～な～りギリギリに着いた様子でしたけど？」
ナガト「さ、流石です・・・。・・・で、でも！０７：５９ぐらいに門を越えていましたので・・・、ギリギリセーフ!!・・・かな？」
霧島は、今度はメガネを中指と親指でクイッと上げて、ナガトを見る。これは怖い。
霧島「警備さん？私が言っている事は、時間内に勤務を始められるって事であって、鎮守府に入っておけばいいって事では無いんですよ～？」
ナガト「・・・はい・・・仰る通りです・・・。アイツらにも次は無いぞって、ちゃんと言っておりますので、今回は堪忍してやって下さい。・・・すいません・・・」
深々と頭を下げるナガト。そんなナガトを見て霧島は苦笑した。やり過ぎたかしら？と、

霧島「まぁ、そんなに悲しい顔しないで下さい。反省もしてくれてるし、あの子達にも言って聞かせてるのでしたら、私は大目に見ます。さっきまで秘書艦をしていましたから一応言って置かないと・・・ね？」

ナガト「本当にすいません。次から気を付けます・・・」

霧島「はい！よく言えました♪」

ナガトの頭をナデナデする霧島。

霧島自身の許しの合図。怒ると怖いが、他の艦娘達に慕われる、強くて優しい霧島の姉御である。

ナガト（・・・・・結構恥ずかしいんですが、これ）

霧島「・・・・・あら、ごめんなさい・・・、長く引き止めてしまいましたね」

ナガト「い、いえ！指導される事をしてしまった、自分自身の落ち度です。ご指導ありがとうございました」

霧島「そうですか？そう言っていただければ。では、私はこれで」

ナガト「お疲れ様です！」

霧島はナガトに別れを告げ、執務室に行こうとした。

霧島「・・・あ、そうそう。言って無かった事が・・・あら？」

振り返ったら、もうそこにナガトの姿はなかった。

霧島「もう行っちゃいましたか・・・、どうしよ、長門秘書艦も聞いていたからなぁ・・・。私が許しても・・・」

長門は許さないかもしれない。

霧島「・・・ナガト警備員。どうか、ご無事で」

ナガト警備員が向かったと思われる方向へ敬礼し、霧島はその場を後にした。

その頃、執務室ではキリヤマと長門が仕事に励んでいた。

・・・コンコンコン

キリヤマ「・・・どうぞ」

ナガト「失礼します。ナガト警備員、夜間勤務終了、異常無しです。及び、勤務中7隻を除いての全艦娘、出隻を確認しました」

キリヤマ「・・・ご苦労だった。・・・リョウ」

ナガト「はい？何でしょうか？」
何故か、キリヤマは笑いを堪えている様だ。
キリヤマ「フフッ、キミの姉貴分が言いたい事があるそうだ」
ナガト「はい？」
ナガトは、秘書艦長門の方を見る。
ナガトが警備員として鎮守府で働き始めた頃、長門は、『長門の名を持つ以上、それに恥じない働きをしてもらわなければ困るぞ！』と、ナガトに厳しく教育を施す。それを見た、周りの艦娘からは、『うわぁ、かわいそう』『ありゃ、逃げるで』『ヤベェ、マジヤベェ』と、悲鳴に近い声が飛んだ。そんな壮絶な戦艦　長門のシゴキに、ナガトは必死に付いていった。そして、教育をこなしている内に、いつしか２人の間に姉弟に近い信頼関係が生まれていた。
これを見た、キリヤマ提督と長門型２番艦　陸奥から、
キリヤマ『もう姉弟でいいんじゃないか？陸奥も一緒に』
陸奥『アラ♪アラアラアラ♪家族が増えたわ♪やったわね！長門♪』
長門　　ナガト『おい！やめろぉ!!』
お墨付きとおフラグをもらった。
長門「リョウ、私の言いたい事が・・・わかるな？」
そんな姉貴分、長門からの質問。
ナガト「・・・朝方の件ですか？それは、私の落ち度です。申し訳ありません」
霧島さんに聞こえていたんだ、長門さんにも聞こえてたはずだ。言い訳はしない。
長門「朝方の件はいい、霧島がやってくれているからな」
やっぱり、わかっていたか・・・。流石、長門秘書艦・・・・ん？
ナガト「では、何でしょうか？」
長門「はぁ・・・、やはりわかっていない様だ・・・座れ」
長門が座れと指示をする。ナガトは、その場に正座する。キリヤマが、思わずブホッと吹き出す。
キリヤマ「本当によく訓練されているな・・・、フフフ」

長門「当たり前だ！・・・さて、リョウよ。言いたい事がある」
ナガト「??、はい、何でしょう？」
長門「朝方の白露型の件は、遅刻ギリギリのアイツらの失態だ。お前に責任はない」
ナガト「そ、そうでしょうか・・・？」
長門「むしろ、閉めずに待っていたお前のお蔭で、あいつらは遅れずに済んだ。それがお前の優しさであり長所だ。私は、感心している。・・・アイツら可愛いしな」
ナガト「・・・ん？あ、ありがとうございます・・・」
長門「アイツらに「次はない」と言っていたな。注意する事は大切だ・・・」
ナガト「は、はぁ・・・」
何だろう、話が全く読めない。だが、突然、
長門「だが、あの注意の仕方は、なんだ!?」
ナガト「えぇ？何って・・・あぁ」
ナガトは、思い出していた。白露型の４人に言って事を、
ナガト『次遅れたら、即あの人の説教行きだぞ～！・・・』
長門「駆逐艦の子達に言っていた、あの人とは誰だ？」
ナガト「い、いや、だ、誰ですかね～？ワカラナイナァ？」
長門「ほう？ごまかすか？じゃあお前が言うまで、私が長門の名の重さについて、またみっちり教えてやろうか!?」
ナガト「・・・そういう事するから、駆逐艦達に怖い～、長い～って・・・」
長門「やっぱり私の事か!?・・・そんなに長いか？」
ナガト「そりゃもう、長いです。・・・凄く」
キリヤマ「長いねぇ・・・確かに」
長門「うむむ・・・」
ナガト「というか、こんな事で自分は正座されているんですか？」
長門「こんな事とはなんだ!?私にとっては死活問題だぞ!?お前はアイツらの良さに気づいていない!!良いだろう！私がアイツらの魅力について、みっちりと・・・」

ナガト「・・・あ!もうこんな時間だ!では、提督、自分は警備に戻ります!失礼しました～」
ナガトは長くなりそうな説教から脱出を試みる。それと同時にキリヤマ提督が長門とナガトの間に入った。
キリヤマ「ご苦労だったぞ、リョウ・・・後は任しておけ」
ナガト「すいません、恩に着ます」
長門「こら、リョウ!!まだ話が・・・」
キリヤマ「まぁまぁまぁ、もういいじゃないか?長門?」
長門「むむむ～」
提督に止められたら流石に抵抗出来ない。ナガトは執務室から脱出した。
キリヤマ「リョウも仕事だっただろ?休ましてやろう。さ、仕事に戻ろう。やることは、沢山あるからな」
長門「・・・すまない。了解だ」
キリヤマと長門は仕事に戻る。
長門「・・・だったら提督、貴方も少し休んで来たらどうだ?昨日から働きづめだろう?」
キリヤマ「まだ大丈夫だ。・・・この書類が片付いたら、少し休ましてもらおうかな」
それを聞いた長門は、提督の机の書類に目を通す。
長門「・・・これは・・・、私でも片付けられる物だぞ?書類の方は私がやっておくから提督は・・・」
キリヤマ「う～ん、まだここで待って居たいんだよ」
長門「ここで?、・・・あぁ、摩耶達か・・・」
アマギ鎮守府の出席確認で、7隻が今も勤務中であった。先程まで秘書艦を勤めていた霧島と、艦隊として出撃している旗艦　重巡　摩耶が率いる6隻である。
キリヤマ「長い出撃だったからな、摩耶達は、真っ先に迎えてやりたい」
長門「フッ、そうだな、戦艦・空母無しで、あれだけ成果を出したんだ。迎えたい気持ちは分かる。だが・・・、」

長門は、執務室の時計を見る。
長門「摩耶達が帰ってくる予定は、昼頃だぞ？昼まで時間はある。今のうちに仮眠でも取ってきたらどうだ？」
キリヤマ「・・・う～ん、だけどなぁ・・・」
それでもキリヤマは、椅子から動こうとしない。
長門「・・・はぁ・・・提督」
・・・気がつくと長門の顔が目の前あった。長門は身を乗り出して、力強く純粋な瞳で真っ直ぐ提督を見つめていた。歴戦の戦士とは思えない、キズ1つない綺麗な顔が目の前まで迫る。キリヤマは思わずたじろいでしまう。
長門「今も摩耶達が必死に頑張っているのに、自分は休むなんて・・・、とか思っているだろ？」
キリヤマ「・・・・・・」
長門「・・・提督。貴方がいつも私達の事を考えてくれるのは、とてもありがたい。だが、そのせいで提督自身が倒れてもらっては困る」
キリヤマ「・・・だがしかし・・・」
キリヤマは反論しようとするが・・・。
長門「・・・帰って来た摩耶達を、疲れた顔で迎えるのか？迎えるのであれば、元気な顔で迎えるべきだろう？」
長門の言葉にようやく観念した。
キリヤマ「・・・フッ、分かった分かった、長門には敵わんな。じゃあ、少しだけ休ませてもらおう。何かあったら直ぐ起こしてくれよ」
長門「あぁ！この長門が責任をもって、勤務に当らせてもらおう。ゆっくり休んでくれ」
キリヤマ「あぁ、頼んだぞ」
キリヤマは長門に後を任せ、自分は仮眠室に向かった。
長門は提督を見送った後、執務室の窓から広がる大海を見て呟いた。
長門「・・・摩耶、みんな・・・、早く帰って提督を安心させてやってくれ・・・」

１０：００
――某海域
何も障害物が無い、広がった大海。
その大海の上を滑る様に移動する６隻の艦娘がいた。
加古「ウェ～～・・・、しんどいよぉ・・・、鎮守府まだかよぉ・・・、早く帰って寝たいよぉ・・・」
大井「ちょっと！加古さん!?人が言わないでおこうと黙っていたのに！なんで言うの!?」
加古「だってぇ、事実だから仕方無いじゃ～ん・・・」
大井「・・・チッ！これだから重巡は・・・」
北上「まぁまぁ大井っち、抑えて抑えて、皆疲れてるし、言葉に出ちゃうのは仕方無いよぉ」
大井「北上さん!!なんてお優しいお心!!・・・どこぞの重巡にも見習って欲しいわ・・・」
加古「はいはいはい・・・、次は気をつけますよ～」
大井「何です!?寛大なお心を持つ北上さんに対して、その態度は!?だから貴女は・・・」
海のド真ん中で言い争っている艦娘達が、重巡　加古と雷巡　北上、大井である。その後方で、駆逐艦の雪風は楽しそうに、浜風は呆れながら見ていた。
浜風「はぁ・・・、また始まりましたね・・・」
雪風「そうですね！皆仲良しですね！浜風！」
浜風「い、いや、そうじゃなくてな？雪風・・・まぁいっか」
確かに皆仲がいい、そして元気だ。激戦の連続で、普通は声も出したくなくなる程疲れているはずだ。それが言い争いできる程の余裕がある。
浜風（この出撃が大成功したからか、いや、旗艦と提督のおかげだろうな・・・）
そう思いながら、言い争っている３人から旗艦に視線を移す。
この戦いの功労者でもある、旗艦　重巡　摩耶は黙って前を見てい

たが・・・、
摩耶「オメエら、さっきから・・・ウザイ！」
北上「えぇ？ちょっと摩耶ち～ん、そりゃないよぉ」
摩耶「誰が、摩耶ちんだ！こらぁ！変なあだ名付けんじゃねぇよ!!」
北上「だってぇ～」
摩耶「別にお前だけに言ってねぇよ・・・。オメエら、もうすぐ鎮守府だからって気い抜きすぎ！・・・行きはヨイヨイ、帰りはコワイ～って誰かさんが言ってだろ！」
加古「それアタシのセリフ・・・」
摩耶「いいから！さっさと行くぞ！浜風！電探を使って辺りを警戒！」
浜風「は、はい！」
浜風は直ぐに電探を使い周辺を探る。
浜風「ん？これは・・・？」
雪風「？　どうかしたんですか？」
摩耶「・・・どうした？何かいたのか？」
浜風「・・・！、１０時の方向、敵艦の反応あり!!」
６人に戦慄がはしる。しかし摩耶は冷静だった。
摩耶「・・・数は？」
浜風「それが・・・、駆逐が２隻・・・」
加古「な、な～んだ、駆逐艦かよ～、脅かすなよ～」
摩耶「敵の位置、動向は？」
浜風「近い所にいます！ゆっくりですが、こちらに近付いてます」
摩耶は考える。今回の出撃は大成功を治めたが、それでも長い遠征だった為かなり疲労が溜まっている。他の者も、さっきまでギャーギャーやっていたが、かなり疲れているはずだ。燃料も弾薬も残り少ない。油断して手痛い攻撃を喰らって大破などしたら元も幸もない。
今回は、戦闘は回避で良いだろう。そう思い、戦闘は回避せよ、と口を開こうとした、その時、
加古「あ！見えた！アイツらだ！」
加古が指している所に、駆逐艦イ級２隻がいた。イ級は、特に戦闘

を仕掛けるわけでもなく、ずっとこちらを見ていた。まるで誘っているかの様に、
加古「ふっふ～ん！駆逐艦なら、アタシだけで充分！」
加古が、突然イ級に向けて突進していく。
摩耶「って!?おい！下がれ加古！」
北上「まぁ、大丈夫じゃない？加古っち強いからさぁ」
摩耶「そういう問題じゃねぇ!!」
摩耶の心配をよそに、加古はイ級に砲撃を開始する。
加古「ブッ飛ばす！」
加古から放たれた弾丸は、イ級めがけて飛んでいく。そして、
イ級に着弾。一撃でイ級を仕留める。火柱を上げながら沈んでいった。
加古「まだだよぉ！」
加古は、残ったもう1隻のイ級に砲撃。だが、僅かに外れた。イ級は慌てて転回し退却を始める。
加古「逃がすか！」
加古は再度狙いを定める。・・・・・だがその時！
浜風「!?、加古さん!!敵機直上!!」
加古「?!、何でぇ!?」
今、駆逐艦しかいないと油断していた。だから味方から放たれた言葉に混乱してしまった。加古は反応が遅れる。
頭上を見たら、敵の艦載機が自分に向けて爆弾を投下していた。もう避けれない。
加古「あ、前に出すぎた・・・・!!」
摩耶「逃げろ!!!加古ぉぉぉぉぉ!!!!!」
摩耶が必死に叫ぶ。
だが、投下された爆弾は加古の頭上で炸裂し、
・・・・・加古は爆炎に包まれた。

1話　その名はセブン　3

１０：３０　提督棟　執務室
長門の連絡でキリヤマは執務室に入る。
キリヤマ「摩耶達から救援要請!?本当か!?」
驚きの表情を隠せないキリヤマ。長門は無線機のマイクを片手に答えた。
長門「あぁ、先程、浜風からの救援要請が来た・・・」
キリヤマ「・・・被害は？被害はどうなっている？」
長門「すまん・・・無線の範囲外なのか、内容が途切れ途切れで詳しくは・・・だが」
キリヤマ「だが？」
長門は苦悶の表情を浮かべながら答えた。
長門「・・・浜風から尋常じゃない焦りを感じた・・・摩耶達の身に何かが起こったのは、・・・間違いないだろう」
キリヤマ「・・・・・・わかった」
キリヤマは、一回だけ深呼吸をする。頭のスイッチを入れ替える様に、
すぅぅぅぅ・・・ふー・・・よし
冷静さを取り戻したキリヤマは、長門が持っていた無線機を手に取る。
キリヤマ「緊急召集！金剛、比叡、榛名、・・・霧島、一航戦、二航戦は至急作戦室へ集合せよ。繰り返す・・・、」
・・・・・指示を出し終り無線を置いて振り返ると、
長門「提督・・・」
長門が心配そうにキリヤマを見ていた。キリヤマは「大丈夫だ」と言う様に、軽く笑顔を見せた。だが、直ぐに笑顔から切り替わり軍人に戻る。
キリヤマ「・・・長門も作戦室に移動。そこから浜風達を呼び続けろ」
長門「!!、了解した!!」

長門は駆け出した。
作戦室へ向かう長門を見送ると、キリヤマは窓から見える海をじっと睨んだ。
キリヤマ（くっ・・・・・・・・・・!、いや・・・・大丈夫だ・・・・、まだ、まだ間に合う・・・・）
キリヤマは何度も自分に言い聞かせる。無意識に手に力が入った。
キリヤマ（もう・・・・〝あの時〟とは違う。あの時から、我等は前よりも増して強くなった。・・・やらせはしない。〝あの時〟の様には・・・・絶対に・・・・!!）
大海を見るその目には、並々ならぬ決意を宿していた。
その決意と共にキリヤマは作戦室へ向かった。

その頃、正門前　警備室
山城「・・・・・・・だからぁ、・・・・聞いてます?」
ナガト「あ、あぁ、聞いてますよ?」
警備室の椅子に座り、受付口からいつもと変わらない景色を眺めていたナガトだが、背後から聞こえた山城の声に応える。
扶桑型戦艦2番艦の山城、アマギ鎮守府にいる戦艦の1人で、今は改装され航空戦艦と言う枠組みになっている。黒髪のショート、金剛型と同じく巫女服に似た服装を着ている。姉の扶桑は黒髪のロングで、姉妹共に一見して見れば、お淑やかな大人のお姉さんの様な風貌。だが昔は、超ド級戦艦と呼ばれていたらしく、その風貌に似合わず彼女達の背負う艤装はとてつもなくデカイ。その艤装に付いている主砲はアマギ鎮守府で戦艦長門に次ぎトップクラスの火力を誇っていた。だが、あまりに大きい艤装の為、動きは遅く、よく被弾してはドックに入れられる。
その度山城は「私・・・最近ドックばっかり居ますよね・・・・」とか「どうせ私は欠陥戦艦ですよぅ・・・」「不幸だわ・・・・」と、後ろ向きな考え方が目立つ、少し残念な子である。
そんな山城は、警備室に敷かれた畳みの上に座っていた。ちゃぶ台にあるナガトが淹れたお茶を飲みながら。

ナガト「・・・山城さん?あの・・・お仕事は?」
山城「待機でーす。・・・どうせ「あんた待機ばっかじゃないか!」・・・とか思っているんでしょ?」
ナガト「そ、そんなこと思ってませんよ?待機も立派な仕事の1つですよ!・・・鎮守府の秘密兵器って奴ですね!良いじゃないですか!」
山城「・・・どうせ私は万年秘密兵器ですよ~・・・不幸だわ・・・」・・・自分で言って凹んだ。
ナガト「・・・自分の発言で凹まないで下さい」
山城「い、いいじゃないですか!別に!・・・てか、さっきの話・・・聞いてましたぁ?」
ナガトがこの鎮守府に警備員として雇われて直ぐ　あの事件から生き延びた、その幸運に少しでもあやかろうと、何人かの艦娘達が相談や願掛けで警備室に訪れていた。山城もその1人である。
ナガト「え~と・・・提督が自分に振り向いてくれない話でしたっけ?」
山城「違います!扶桑姉様が私に振り向いてくれない話ですぅ!!」
ナガト「知らんがな!!いつも一緒にいるでしょうが!!何でわかんないの!?」
山城「それが分かっていたら苦労はしませんよ!!」
ナガト「妹の貴女が分かんないのに、他人の俺が分かるわけないでしょ!!」
山城「うぐぅ!せ、正論・・・」
ナガト「はぁ、提督のことなら男の目線で何か言えると思うけど?」
山城「あっ、姉様以外は興味ないので大丈夫です」
ナガト「おいコラ」
山城の見事なシスコンぶりに呆れていると、
キリヤマ『緊急召集!金剛、比叡、榛名、・・・霧島、一航戦、二航戦は至急作戦室へ集合せよ。繰り返す・・・』
ナガト「・・・緊急召集か・・・何かあったのかな?」
山城「さぁ、出撃中の摩耶達が何かポカしたんでしょう?」

ナガト「山城さん？行かなくていいの？」
山城「ええ、私は呼ばれてないですし、何かあったらまた呼ばれるでしょうし」
ナガト「それはそうだけど、摩耶さん達のこと心配じゃないんですか？」
山城「心配じゃないのは嘘ですが、下手に騒いでは、それこそ提督のご迷惑になりますよ。今は、直ぐに動ける様ここで待機です。・・・待機も立派な仕事の１つ。そうでしょ？」
山城の言葉にナガトは思わず笑う。
これは一本取られたと。
残念な子に見えても、やはりアマギ鎮守府にいる歴戦の戦艦娘だ。ちょっとのことでは動じない。
山城「まぁ、姉様のピンチだったら、命令無視しても向かいますけどね！」ドヤァ
ナガト「台無しだよ!!」
ホントこのシス艦は・・・、そう思いながらナガトは頭をかかえた。
・・・その時、

――――――――――――――――
ナガト（ん？）
――――――――――――――――
ナガト（!?）
――――――――――――――――
・・・!!――
ナガト「・・・・・・・・・」
山城「・・・？、どうしました？」
いきなり黙り込んでしまったナガトを山城は不思議そうに見る。
山城「とうとう無視までされてしまうなんて・・・ふｋ・・・」
ナガト「山城さん」
山城「・・・セリフ１つ言わしてくれないなんて・・・ふこｕ」
ナガト「ちょっといいですか？」
山城「・・・何ですか？」
ジト目でナガトを見る山城、そんな姿に気にせずナガトは、

ナガト「ちょっとこっちに、・・・こっち!こっち!」
と、言いながら手招きする。山城は渋々そばに寄る。
山城「もう、何ですぅ?」
ナガト「ここに座ってくれますか?」
山城「?・・・え、えぇ、はい」
山城はナガトの言われた通りに指定された椅子に座る。そこは、先程までナガトが座っていた椅子だった。するとナガトは直ぐに山城の背後に回る。
山城「え?えぇ?な、何ですか?」
あまりに急な動きに山城は戸惑った。
山城(ま、まさか!?こんな所で!?こんな所で、私・・・いたずらされちゃうの!?い、いや!こんな所でイヤらしいこと・・・良い子が見ちゃいけない様なこと、いっぱいされちゃうの!?ダ、ダメですぅ!!・・・だ、だけど読んでくれる人達を増やす為にも、私が一肌脱いだ方が・・・イヤイヤイヤイヤ!ダメダメダメダメェ!バカ!!何言っているの山城!!わ、私には扶桑姉様という心に決めた方が・・・あ、あぁ!ダメ!らめぇ?!)
必死な山城。ナガトはそんな山城の背後から手を伸ばした。
山城(・・・扶桑姉様・・・ごめんなさい。私は、少しばかり先に参ります・・・。大人の階段勝手に登る、不肖な妹を・・・どうか・・・許して・・・)
ひと思いにヤってくれ、そう覚悟を決めた山城。
・・・・だが、ナガトが掴んだ場所は、山城の体ではなく座っている椅子だった。ナガトは椅子ごと山城を受付口に移動させた。
山城「・・・ふぇ?」
ナガト「今日の来客は、今のところありませんから」
山城「え?え??」
ナガト「あ、もし客が来たら、秘書艦の長門さんに連絡するんですが、緊急召集が出ているから、今は入れないで下さい。納品業者も同じく」
山城「え?ナ、ナガト警備員さん?」

見当違いで戸惑っている山城を余所に、さらに説明を続けるナガト警備員。
ナガト「・・・一応一通りの説明は済んだので、後は・・・おぉそうそう、これを」
そう言って山城の頭に自分の帽子を被せる。アマギ鎮守府のロゴ付きのキャップ。だが、頭の上の船橋が邪魔して帽子が斜めになる。少々不格好だが気にしない。
ナガト「・・・ん～これで・・・よし！じゃあ自分は少し巡回に行きますので！」
山城「え？え？今から!?」
ナガト「はい！じゃあよろしくお願いしますす！」
山城「ちょ！ちょっと!?」
山城の制止を聞かず、ナガトは警備室から外に出る。
ナガト「大丈夫！直ぐに戻って来るから！じゃ！行ってきま～す！」
そう言ってナガトは鎮守府内へ消えて行った。山城は只々ナガトが走り去った方向を見ているしかなかった。そしていつもの様に、こう呟く。
山城「・・・ふ、不幸だわ・・・」

――――提督棟　作戦室
キリヤマ「皆、急に呼び出してスマン。だが、先程摩耶率いる第２艦隊から救援要請が来た」
キリヤマの前には、呼び出された金剛型４姉妹、一航戦赤城・加賀達の姿があった。その表情は真剣その物だった。
金剛「ＨＥＹ、提督？摩耶達のいるｐｏｉｎｔ（ポイント）はもう解ってるノ～？」
キリヤマ「いや、まだ詳しい場所は解っていない。先程から長門が呼び掛けているが・・・救援要請されてから、未だに無線が繋がっていない。敵に足止めされているか、無線の故障か・・・どちらにせよ、摩耶達の身に何かあったとしたら・・・時間が惜しい。・・・これよ

り作戦の概要を説明する！」
キリヤマは地図を広げる。
キリヤマ「金剛達は一航戦赤城・加賀を連れて出撃。摩耶達の出撃した海域はここから南南東の方角。まずはそこから探して行く。二航戦蒼龍・飛龍は先に鎮守府正面海域を探してもらっている。道中で二航戦と合流し一航戦、二航戦で広範囲で索敵しながら摩耶達を探してくれ。摩耶達を見つけ次第、金剛達が援護に入ってもらう。お前達の火力で敵艦を追い払え。負傷した艦は曳航。そのまま戦闘海域を離脱し鎮守府に戻って来い」
金剛「ＯＫ、・・・敵さんしつこく追って来たらどうするネ？」
キリヤマ「その時は一航戦、二航戦に敵艦の相手をしてもらう。赤城、加賀、行けるな？」
赤城「はい！おまかせ下さい！」
加賀「・・・沈めてしまっても良いのでしょう？」
赤城「加賀さん!?それは慢心・・・！」
キリヤマ「あくまでも摩耶達の救援だ。出過ぎた行動は慎んでくれ」
加賀「・・・了解」
キリヤマ「だが・・・」
加賀「だが？」
キリヤマ「あまりに敵が追い回してくるようなら・・・任せる」
加賀は不敵な笑みを浮かべる。
加賀「了解・・・！」
キリヤマ「これは時間との勝負だ。私はお前達の機動力にかける。摩耶達を・・・頼む!!」
「了解!!」、全員が応えると次々作戦室から出て行く。
キリヤマ「霧島！」
霧島「はい？」
作戦室から出ようとした霧島は、提督の呼ぶ声に足を止めた。
キリヤマ「・・・すまん。世話かけるな・・・」
霧島「何言ってるんですか。こういう時こそ働かないと！」

キリヤマ「そう言ってくれると助かる。・・・頼んだぞ」
霧島「はい！摩耶さん達を迎えに行ってきますね！」
霧島は提督に敬礼し金剛達の後を追い作戦室を出て行った。
それを見送ったキリヤマは、そばにある椅子に腰かける。
キリヤマ「やることはやった。後は・・・」
チラッと長門を見る。目があった長門は無言で首を横に振る。まだ連絡が取れない状態らしい。少しでも無線が繋がれば、まだ望みがある。だが、その頼みの連絡がないとなると。・・・最悪の事態が頭をよぎる。
キリヤマはハッとなり、頭を振って今考えてた事を振り払う。そして手を組んだ。
キリヤマ（どうか・・・無事に帰って来てくれ・・・。どうか・・・）
キリヤマに残された事は、ただ祈る事だけだった。

――某海域
摩耶「あ～あ!!!行きはヨイヨイ帰りコワイーって！よく言ったもんだなぁ!?加古ぉ!?」
加古「ひぃ～！すんませ～ん!!」
・・・加古は生きていた。
敵艦載機の放たれた爆弾は確かに加古に目掛けて落ちていった。直撃すれば轟沈確定と思われたその爆弾は加古に命中する寸前に爆発したのだ。
・・・雪風の連装砲により。
浜風が加古に敵艦載機の存在を叫んだ時、雪風は連装砲で艦載機を撃ち落とそうとした。だが狙った時にはもう艦載機から爆弾が放たれていた。だが雪風は瞬時に爆弾へ狙いを変え、加古の頭上に向けて発砲した。
（お願い！当たって!!）そう願い放たれた雪風の砲弾は加古の頭上の爆弾に見事命中。加古は直撃を免れ、奇跡的に中破にとどまった。
摩耶、北上、大井はあの爆発を見て、最初は直撃したと思っていた。だが、浜風だけ近くから発砲音がしたのに気づいた。浜風が発砲音の

出所の雪風を見ると、
雪風「・・・ホッ!?（　。　o。；）」浜風「(―ω―；) エェ・・・」
・・・雪風自身も当たると思ってなかったらしい・・・。
まさに奇跡だった。
摩耶「しばらくは！雪風に頭が上がらねぇな!!」
北上「ホントだねぇ！・・・っと!!」
北上は降り注ぐ砲弾を避けながら単装砲で応戦する。
そして今は、周りの敵艦と交戦中である。始めは駆逐艦しかいなかったが、今では軽巡1隻、軽空母2隻、駆逐2隻に増えていた。
大井「ん～もう！何で増えてるんですか!?水中で待ち伏せでもしてたんですか!?コイツらは!?」
摩耶「あながち間違ってないかも・・・な！」
加古「ええぇ!?今までそんな事やらなかったのに!?」
大井「今日から始めたんじゃないんですか!?そこに、どこぞの重巡が引っ掛かりましたけど!!」
加古「うう～！どうか許してぇ!!」
摩耶達は敵に囲まれ、身動きが取れなかった。どうやら鎮守府に帰らせたくないらしい。
北上「ははっ！モテる娘はツラいねぇ・・・！」
摩耶「こんなモテ方は・・・ご遠慮してえ・・・な!!」
冗談交じりだが、摩耶達にはあまり余裕がなかった。長く海域に出撃して、燃料も弾薬も残り僅かだからだ。砲弾を避ける度に燃料は消費され、反撃する度に弾薬が無くなっていく。このままでは、戦いに勝ったとしても鎮守府の着くまでに燃料が底を尽きてしまう。いや、この戦いで勝てるかも分からない。まさに窮地に立たされていた。
摩耶（・・・仕方ねぇ、浜風達を先に逃がすか・・・。アイツらの機動力ならここから逃げれるだろ・・・そして鎮守府にもう一度救援要請・・・ちっ！一種の賭けだな・・・）
自身の頭の中で最善の策を絞りだす。そして雪風達を見る。雪風達も必死に砲撃を躱していた。
摩耶「雪風！浜風！ここはあたし達が何とかする！オメェ達はここ

から鎮守府まで後退しろ!!」
雪風「　　!?　　何を言ってるんですか!?そんなことできるわけ・・・」
摩耶「バカ野郎!!あたし達は置いて逃げろってことじゃねぇよ!!助けを呼んで来いってことだ!!」
雪風「で、でも・・・」
雪風は納得できないらしい。だが説得する時間はない。
摩耶「あぁーもう!浜風!その分からず屋と一緒に早く行け!!手遅れになんぞ!!」
浜風「は、はい!雪風!行くぞ!」
雪風「ま、摩耶さん!」
浜風は、摩耶の指示通り雪風を引っ張り、この海域からの脱出を始めた。摩耶はそんな二人を見て小さく頷く。
摩耶「そうだ。それで良いんだ。ッたく、世話が焼けるぜ・・・」
だが、上空を見ると、
摩耶「!?　　なにっ!?」
摩耶は目を見開いた。今の今まで自分たちを狙っていた敵艦載機が急に目標を変え、雪風と浜風に向かって行った。
摩耶「っち!行かせるかよぉ!!」
摩耶は敵艦載機にむかって機銃を構えた。
―ドドドドドドドドドド!!―
摩耶の機銃から放たれる無数の弾丸が濃い弾幕となって敵艦載機に襲いかかる。その弾幕に一機、また一機と落とされていった。
だが後、一機と言うところで・・・、
―ドドドドド・・・カチッカチッ・・・・・・―
摩耶「・・・な!?」
弾切れだ。残り少なかった弾薬が底をついたのだ。
摩耶「浜風!雪風!逃げろ!!」
摩耶は必死に叫んだ。
それに気づいた浜風は振り返る。振り返った先には、必死に叫ぶ摩耶。そして上空には、こちらを狙って一直線に向かって来る艦載機。

その艦載機から二人に向けて爆弾が放たれた。狙いは・・・雪風か!!
浜風は連装砲を構えた。だが、雪風の様に上手く当てる様な射撃の腕はない。
浜風「・・・!!雪風!!」
雪風「え?キャア!?」
浜風は雪風を力いっぱい突き飛ばした。そして、
―ドオオオオオオオオオオオン!!!―
雪風「・・・・・うう・・・あれ?」
直ぐ近くで爆発音と衝撃があったのに雪風は無傷だった。不思議に思い雪風は周りを見渡した。そこには、
雪風「あ・・・あ・・・嘘・・・嘘だ・・・!」
・・・・・浜風の・・・・変わり果てた姿があった。
雪風「い、いや・・・!は・・・浜風ぇぇぇぇぇぇ!!!」

1話　その名はセブン　4

アマギ鎮守府　海岸付近　高台

鎮守府の建物から少し離れた場所、そこも鎮守府の敷地内に入るが、滅多に人が入らない。艦娘も提督もその場所にほとんど来る事がない。そこに向かう道は長い時間放置されていたらしく、雑草が生い茂ってまるで獣道だった。獣道を抜け、視界が開けた先には高台がある。そこからは広大な海を一望できる。

山城に言った巡回と言うのは嘘。ナガトはその高台にいた。

ナガト「・・・・・・・・」

ナガトは目の前に広がる海を睨む。その目は何かを探していた。・・・・・すると、何かを感じ取ったのか一つの方向を鋭く睨み始めた。次の瞬間、ナガトの目が一瞬だけ輝く。

ナガト「・・・・・見つけた」

人間の肉眼では絶対に見る事はできない景色。だがナガトには見えた。

水平線の向こう側、この大海のド真ん中で窮地に立たされている仲間の姿を。

複数の深海棲艦に囲まれながらも必死に抵抗する摩耶、北上、大井、加古。そして、傷だらけで倒れ、ピクリとも動かず浮かんでいる浜風、その浜風の体を必死に揺すり、涙を流しながら呼びかける雪風の姿が。ナガトの目にはっきりと見えたのだ。

ナガトは胸の内ポケットからある物を取り出した。それはゴーグルの様な形をしたアイテム。燃える様な紅い色をしたアイテムは神秘的な光を放っていた。

――ウルトラアイ――

アイツから託された信頼。

・・・あの時突然現れたアイツ。助けてくれたと思ったらいきなり大説教しやがったアイツ。そんなアイツからの信頼の証　ウルトラアイをじっと見つめ、語りかけた。

ナガト「・・・行くぞ！・・・相棒！」

そう言うとウルトラアイはその言葉に応えるかの様に力強く輝き出す。
ナガトはウルトラアイを眼前に構え、そして・・・、
――――デュアッ!!!!――――
叫びと共にナガトの体は大きな赤い光に包まれる。
そして赤い光は力強く輝きながら大海へと飛びたった・・・。

――某海域
・・・・暗い・・・・冷たい・・・・痛い・・・・今、自分が率直に思う事。私はあの子を庇って・・・・死んだのか・・・。
今思う事はあの子の安否・・・・雪風は・・・・？
・・・だけど暗くて何も分からない。あぁ・・・このままゆっくりと沈んで行くのか・・・。
――・・・ぜ・・・・！・・・・・・・・かぜ！・・・・――
誰かが自分を呼ぶ声がした。耳に入って来るのは、聞き慣れた声。それは次第にはっきりと聞こえてきた。
・・・・・・・雪風？
雪風「浜風!!浜風!!お願いです!!目を開けて下さい!!」
必死に自分を呼ぶ雪風。声は聞こえているが、どこに姿があるか分からない。
ふと浜風は、自分が目を閉じている事に気付いた。あの衝撃と身体中の激しい痛みで気が付かなかったのだろう。浜風はゆっくりと目蓋を開く。目の中に光が入る。
まぶしい・・・。目の前は真っ白で何も見えなかったが、目が慣れていく内に一つの顔が浮かんできた。
雪風「あぁ・・・あぁ・・・！浜風ぇ・・・!!」
涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっている雪風の顔だった。浜風は安堵する。
浜風「ゆき・・・かぜ・・・、酷い・・・顔だ・・・」
雪風「な、何言っているんですか!?死にかかっている人が言う事で

すか!?」
浜風は生きていた。だが、加古と違い、敵艦載機の爆撃を直に受けていた。状態は大破。意識はあるが体がまるで鉛を付けたかの様に重い。航行は難しいだろう。・・・高射砲はまだ使えるが・・・。
浜風は雪風に語りかけた。
浜風「雪風・・・先に・・・」
雪風「嫌です!!お断りします!!」
全てを言う前に雪風は拒否する。浜風は目を見開いた。
浜風「な、何を言っているんだ!?今動けるのは雪風・・・お前だけなんだぞ!?我が儘言うんじゃない!!」
雪風「それでも嫌です!!このまま行ったら残った浜風は確実に沈みます!そんな事は絶対にさせません!!浜風は雪風が守ります!」
浜風「状況を見ろ!!この分からず屋!!お前は皆から託されたんだ!!任務を全うするんだ!いいな!?」
雪風「!?・・・くぅ・・・!」
雪風は黙る。そして静かに立ち上がった。
浜風（そうだ・・・それで良い・・・。私に構わず行くんだ・・・雪風・・・。）
浜風は精一杯の笑顔で送るつもりだった。だが、
雪風「・・・それでも!・・・それでも私は・・・!皆を・・・浜風を置いてなんて行けない・・・!もう置いて逃げたくない!!逃げたくないんです!!!」
浜風「ゆ、雪風・・・!?」
驚きを隠せない浜風。
だが、そんな二人を、とある軽巡は見逃さなかった。
深海棲艦、旗艦の軽巡ツ級である。
ツ級「なんだぁ?なんか駆逐艦2隻がこんな時に派手に言い争ってんぞぉ??」
人に近い体つきに、黒いビキニの様な物をまとい、頭はヘルメットの様な物に覆われている。そして、華奢な体格に似合わない大きな両腕。その両腕には、これまたデカイ大砲がいくつも付いていた。いか

にも〝殴り合い大好き！〟と言っている様な姿だった。その姿通り、このツ級はかなり好戦的であった。
ツ級「こちらの事ぉ、思っ切り無視してよぉ？ちーと舐めてんだろぉ？ゼッてぇそうだろぉ!?・・・これはちょっと懲らしめないとなぁ・・・？」
ツ級が大きな手を振り上げる。
ツ級「ヌ級ぅ・・・・・殺れ♪」
ヌ級「ヌフフフン♪」
そう言うと、軽母ヌ級が艦載機を発艦させた。狙いは雪風達。
ツ級「ギャハッ！そんなにケンカしたいなら勝手にしなよぉ・・・・海の底でなぁ!?」
ツ級が指示した敵艦載機の存在に気づいた浜風は、
浜風「雪風!!分かってくれ！もう艦載機がこっちまで来ている!!早く行くんだ!!」
雪風「嫌です!!もう決めました!!もう逃げません!!」
雪風はそう言うと浜風を庇う様に、こちらに向かって来る敵艦載機の前に立つ。雪風も気付いていたらしい。
浜風「よせ!!雪風!!お前の考えは分かる！だが奇跡は何回も起こる物じゃない！逃げてくれ！」
浜風の必死の制止も聞かず、雪風は連装砲を構え、対空攻撃を始める。
雪風「絶対に！大丈夫!!雪風は沈みません!!」
―ドン！―ドン！―ドン！―
上空に向けて砲撃する。そして空中を縦横無尽に飛び回る、当てる事さえ難しい艦載機を見事に落としていく。
浜風「す、凄い・・・！」
ただ驚くばかりだった。集中力を極限まで高めた雪風はこんなにも強いのか。奇跡と呼ばれる由縁は、この高い集中力にあるのかもしれない。雪風の精密な対空砲撃に、堪らず敵艦載機は雪風から距離を取る。
浜風「・・・これなら・・・もしかしたら・・・」

いけるかもしれない。雪風の戦いぶりにそう期待せざるおえなかった。

・・・・・・・だがその期待は数秒後に脆くも崩れ去った。

―ドン！―ドン！―カチャ・・・カチャ！カチャ！

雪風「・・・へ・・・？う、嘘・・・!?」

・・弾切れだ。ついに雪風の連装砲も使えなくなってしまった。敵艦載機はまだ上空にいる。

浜風「・・・!!くっ!!雪風!!もういい!!お前は充分にやった!!もう私に構わず行くんだ!!お前だけでも・・・!!」

〝生きてくれ・・・〟そう続けようとした。だが、浜風は言えなかった。

雪風が・・・・・・こちらを向いて笑っていたのだ。いつもの様な元気で明るい表情とは違う。静かな優しく、どこと無く寂しげな笑顔。

浜風は動揺する。

浜風「・・・ゆ、雪風？・・・な、何を考えているんだ・・・？」

雪風「・・・言ったじゃないですか。浜風は・・・雪風が守ります」

そう言うと雪風は浜風に背を向け、手を広げてそこから動かない。雪風は自身が盾になろうとしているのだ。

浜風「な、何をやっているんだ!?止めろ!!止めてくれ!!私はいい！私の事はいいから!!早く逃げてくれ!!お願いだから!!雪風ぇ!!」

浜風は涙を流しながら説得する。思う様に力が入らない傷付いた体で必死に雪風を退かそうとする。だが、雪風は一歩も動かなかった。

浜風の必死の願いを、まるで嘲笑うかの様に飛んでいた敵艦載機の一機が、浜風達に向けて急降下を開始した。

・・・そんな浜風達を見て、ツ級は・・・・・・・笑っていた。

ツ級「ギャハ～！泣けるねぇ！これが駆逐艦の絆って奴ぅ!?」

だが、直ぐに笑うの止め・・・、

ツ級「・・・下らねぇ・・・・下らなすぎてムシズが走るわぁ～。も～ういいよ・・・二隻共・・・ナカヨク沈メヤ」

その目は、まるでガラクタを見る様に、その言葉に、慈悲は無い。
――急降下爆撃――
その無慈悲な一撃が雪風達に襲いかかろうとしていた。
摩耶も北上も大井も加古も、敵に猛攻に行く手を阻まれ、雪風達に近付く事さえできない。
北上「あ～・・・これは・・・」
加古「あ!?ゆ、雪風達が!?」
大井「もう!!コイツら邪魔よ!!」
加古「ダメだ・・・!!もう・・・間に合わない!!」
摩耶「・・・くっ・・・!雪風・・・浜風・・・!」
誰もが己の無力さを恥じた。このまま仲間の最期を黙って見ていろというのか・・・!
・・・残された時間の中、雪風はぐっと目を閉じて動かず、浜風は何かにすがる思いで必死に願った。
浜風（お願い・・・!誰か!・・・助けて・・・!）
・・・敵艦載機の一つが浜風達に狙いを定め、爆弾を放つ。

・・・・・・その時!
・・・・・ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンビュン!!
スパァァン!!・・・・・・・・ドオオオオオン!!!!!!
一体何が起こったのか。
敵の艦載機から放たれた爆弾が・・・真っ二つに割れた。更に爆弾を放った艦載機まで真っ二つに割られ爆発四散したのだ。
その時、味方の艦載機でも最新のロケット弾でもない、不思議な光を放ったブーメランの様な物が飛んでいた。
ツ級「!?な!?な、なんだ!?」
摩耶「・・・ブーメラン・・・?」
浜風「な、何が起こった?」
雪風「・・・・・・・ふぇ?・・・沈んでない・・・?雪風は大丈夫・・・ぽい?」
あまりに突然の出来事に誰もが困惑し、雪風に至っては、その場に

ヘタンと座り込んでしまった。
加古「！おい！あれ！」
加古が上空へ指差す先には・・・。
???「・・・・」
加古「赤い・・・」
摩耶「巨人・・・？」
北上「・・・いやいや、巨人って言う程でかくないよ??」
空に浮かぶ・・・赤い巨人・・・ではなく赤い・・・人。人と同じ位の大きさではあるが・・・。
赤い体を持ち、肩や胸には銀の甲冑の様な物に覆われた姿。顔も銀色の仮面に覆われて表情を読めない。だが、黄色に輝く目からは、何とも言えない闘気を放っていた。その姿は、まるで空想の世界から出てきた戦士の様。
光るブーメラン・・・〝アイスラッガー〟が役目を果たし、持ち主である赤い戦士の頭部へ帰る。
―ガチン！―
赤い戦士はそのまま空中から静かに降りて来た。
雪風達の近くに着地すると赤い戦士は二人を見る。
謎の赤い戦士の出現で動揺を隠せない浜風。だが、雪風は不思議と赤い戦士に対し恐怖という物を感じなかった。
雪風「？もしかして・・・」
浜風「ゆ、雪風！油断するな！」
雪風「浜風！もしかしたら・・・この人・・・」
雪風が喋ろうした時、
――ドォン!!!!――
赤い戦士「!!」
背後からの砲撃に気付いた赤い戦士は瞬時に右腕に力を込め・・・、
――バシィィィ！――裏拳。
力を込めた裏拳が砲弾をはじき飛ばす。はじかれた砲弾は有らぬ方向飛んで行き、何も無い海面に衝突し、大きな水柱を作った。
赤い戦士は、打ってきた相手をギロリ！と睨む。

ツ級「！・・・やるねぇ・・・」
砲撃した犯人は、やはりツ級だった。ケラケラと笑いながら赤い戦士を見ていた。
ツ級「こちらの砲撃を、まさか弾くなんてなぁ・・・あんた・・・何者だ？」
赤い戦士「・・・・・」
ツ級「ギャハッ～！無～視ですかぁ!?よくないねぇ!?よくないよぉ!?」
ツ級が大声で笑う。
ツ級「まぁいいさぁ。そいつら庇っている以上、あんたは味方じゃねぇよなぁ!?」
ツ級が片手を上げる。すると水中から新たに軽巡ホ級、駆逐ロ級が現れた。
摩耶「な!?まだいたのかよ!?」
もし赤い戦士が来る前に、この伏兵が出て来ていたら自分達は・・・そう思うとゾッとする。
ツ級「ギャハッ！ギャハッ！新たな敵さんはぁ！しっかりと歓迎しないとなぁ!?単発は防げても連発はどうかなぁ!?」
ツ級が合図を出す。
ツ級を含めホ級、ロ級、イ級が赤い戦士に向けて一斉砲撃。避ければ後ろにいる雪風達が・・・、
赤い戦士は腕をクロスさせる。ツ級はニヤリと笑う。
ツ級「ギャハッ～！そうそう！ちゃんと守らないと後ろの死に損ないが沈んじまうよぉ～!?お前ら!!手加減すんな!!殺っちまえぇ!!ギャハッハッハッハッハッ！」
ツ級達の容赦無い砲撃が赤い戦士に襲いかかる。赤い戦士や雪風達の周りに巨大な水柱が上がる。
赤い戦士「・・・・・・・」
敵の砲撃を受け止めながら赤い戦士は、チラリ・・・と背後を見る。
浜風「くっ・・・！」
雪風「うぅ・・・！」

浜風と雪風が身を寄せ合って苦しそうに砲撃を耐えていた。その姿は、戦う艦娘ではなく、死に怯える普通の少女達だった。
赤い戦士（・・・こんな子達が・・・、いつもこのような死地で・・・、今まで戦っていたのか・・・）
ツ級達の砲撃は更に激しくなる。
赤い戦士は負けず鋭い眼光でツ級達を睨んだ。
赤い戦士（・・・・この子達は、今まで頑張って戦ってくれた。必死に・・・人類の為に戦ってくれたんだ・・・。今度は・・・・・・私達（俺達）が守る番だ!!）
ツ級「生意気に睨みやがってぇ・・・！これで終いだぁ!!」
ツ級達から魚雷が一斉に放たれた。魚雷達は真っ直ぐ赤い戦士へ進んでいく。・・・そして、
赤い戦士「・・・・・・ジュワァ!!!!!」
ドオオオオオン!!!!!
巨大な水柱と黒煙が赤い戦士や雪風達を包み込んだ。ツ級はその光景を見て、腹を抱えて笑った。
ツ級「ギャッハッハッハッハッハッハッハァ！随分と呆気なかったなぁ!?少しはやるって思っていたが・・・、ハァッ！こんなもんかよぉぉぉ!!ギャッハッハッハッハッハッハッ！」
その光景を同じく見ていた摩耶達は・・・・、
加古「・・・嘘だろ？こんな事って・・・・」
大井「くっ・・・！」
北上「・・・雪風・・・浜風・・・・」
摩耶「・・・・・・・・・・・」
絶望していた。雪風と浜風が沈んだ。摩耶は膝から崩れ落ちる。
摩耶「・・・クソがぁ！・・・・クソがぁ！・・・・くそぉ・・・・！」
拳を水面に何度も叩きつけた。だが今の摩耶は、あの巨大な黒煙をただ見ているしかなかった。
ツ級「ギャハッ！後は、残りの奴らをゆっくり片付けるだけだなぁっと・・・ヒヒ・・・！・・・・ヒヒ」
ツ級が笑う中、黒煙が次第に晴れていく。するとツ級の笑みが次第

に凍りついていく。
その中には・・・、
ツ級「・・・・はあ？」
摩耶「・・・あぁ・・・！」
キズ一つ無い赤い戦士、その背後に雪風と浜風の姿があった。
加古「生きてる・・・うぅ・・・生きてるぞぉ!!よっしゃぁ！」
大井「・・・！・・・・・もう！心臓に悪いったら!!」
北上「おぉ・・・！なんか・・・なんか凄いよ！赤い人ぉ!!」
摩耶「・・・ぐすっ・・・バカやろぉ・・・心配させやがって・・・クソがぁ・・・！」
仲間の生存に歓喜する摩耶達。
ツ級「あれを受けて・・・無傷だと!?」
ただ驚きを隠せないツ級。他の深海棲艦にも動揺がはしる。
魚雷が当たる寸前、赤い戦士は瞬時に光の壁〝ウルトラバリアー〟を形成した。広範囲に形成したバリアーは強靭な硬さを誇り、次々と突っ込んで来るツ級らの魚雷の受け止め、その先への侵攻を許さなかった。
幾多の艦娘を沈めてきたツ級らの雷撃を、赤い戦士はものの見事に受け切ったのだ。
ツ級は、ここで初めて焦りの表情を見せる。雷撃の破壊力には絶対的自信をもっていた。あの雷撃を受けて無傷の者がいるなんて・・・。
ツ級「・・・・・て、てめぇ・・・マジで何者だ・・・？」
赤い戦士「・・・・・・・」
ツ級「・・・・っ!!無視してんじゃねぇ!!」
声を荒げるツ級。その顔には、先程の余裕が消えていた。
赤い戦士「・・・・・・」
赤い戦士は、そんなツ級をジッと見ていた。そしてツ級にむかって拳を構えた。
ツ級「なんだぁ？それは？」
ツ級は怪訝な顔を見せたが、すぐに理解したのかニヤニヤと笑いはじめた。

ツ級「まさか・・・てめぇ・・・このツ級様と殺り合うつもりかぁ!?ギャハッハッハッ!面白いこと考えるねぇ!?赤い戦士さんよぉ!?」
赤い戦士「・・・・・・」
ツ級「実はアタシ、格闘は結構強くてねぇ・・・、そこらの深海の奴らの中ではまだ負け無しなんだぜぇ!?そんなアタシと、てめぇは殺り合おうとしてんだ!?どうなんだよ!?んん!?」
赤い戦士「・・・・・・」―ググッ!―
赤い戦士は微動だにしない。真っ直ぐツ級を睨んでいた。ツ級は笑う。
ツ級「・・・そうか・・・〝無駄口叩く前に来い〟ってことかぁ・・・ヒヒヒ!」―ブルン!―
ツ級は、身の丈程にもなるその巨大な腕をグルン!と回す。
ツ級「だが、そんな細腕でぇ!!何ができるんだぁ!?」
そう言うと、ツ級は水面を蹴り、赤い戦士に向けて突っ込んでいった。
ツ級「そんなアンタには!身の程ってもんを!今から教えてやんぜぇ!!ギャハ～!!」
突っ込んで来るツ級に応える様に、赤い戦士も水面を蹴った。
ツ級「そのほっそい腕ごとぶっ潰してやる!死ねやぁぁぁぁぁぁ!!!」
一点集中。ツ級と赤い戦士は、大きく振りかぶって、その勢いのままに互いの拳と拳を衝突させた。

1話　その名はセブン　5

――ガキィィィィン!!!――
激しい衝撃と共に、金属の様な衝撃音が辺りに響きわたる。
その衝撃音の後・・・、
――メキッ・・・メキメキメキ・・・ベキッ!――
何かが潰れる様な怪音が響きわたった。
ツ級「うぐぁ!?」
悲鳴を上げたのはツ級の方であった。ツ級の拳を見ると、人差し指と中指が曲がってはいけない方向に捻れ曲がっていた。
ツ級「・・・・ッ!!」
ツ級は直ぐに捻れ曲がった指を無理やり元に戻す。
メキッ!メキッ!と嫌な音をたてながら指が難とか元の位置に戻った。だが、元の位置に戻った指は完全に潰されており、赤い戦士の拳の跡がくっきりと残っていた。
一方の赤い戦士は叩きつけた右腕をぷらぷらさせながら涼しい顔でツ級を見ていた。
ツ級は、これ以上ない程に激昂した。
ツ級「キサマァ・・・!!!只じゃおか・・・ごぉっ!?」
ツ級の怒号は、赤い戦士の蹴りに掻き消された。ツ級の脇腹に赤い戦士の蹴りがめり込みメキメキと音を発てる。あまりの威力にツ級の体は〝く〟の字に曲がる。
ツ級「ぐぅ・・・ッ!!」
ツ級は、なんとかその場に踏みとどまる。蹴り込まれたミドルキックが想像以上に強烈だったのか、ツ級は堪らず片膝をつける。だが・・・、
赤い戦士「・・・まだ休む時間じゃないぞ?」
ツ級「!!??」
――拳――ツ級の顔面に赤い戦士の拳が飛んできた。渾身のアッパーカット。
ツ級「ふぐぁ!!」

ツ級はアッパーで身体を無理やり起こされた。
そこから赤い戦士の怒涛の連撃がはじまった。
ワン・ツーパンチからボディブロー、頭が下がったら鋭い蹴りでカチ上げる。体が起きたら喉元へチョップを浴びせ相手の呼吸を妨害する。体がまた下がればその背中に何発もチョップを振り落としていく。
ツ級も反撃しようと拳をくり出すが意図も簡単に躱され、逆にその勢いを利用され投げ飛ばされる。投げ飛ばされ体勢を直そうとするツ級だが、瞬時に間合いを詰められ、新たに連撃を浴びせられた。それも、どの攻撃も異常に重く、人間が一撃でも喰らえば即死は免れない程の威力ばかり。その速く鋭い連撃の前に、ツ級は反撃の時を与える事を許されず、ツ級は身体中に無数の傷を作っていった。
そんな状況を周りの者は、ただ観ている事しかできない。
そんな中、摩耶だけは隙を見て浜風達に接近していた。
摩耶「浜風！雪風！大丈夫か!?」
雪風「雪風は大丈夫ですが・・・浜風が・・・」
そう言って雪風は浜風を見る。浜風は心配させない様に笑ってみせる。
浜風「私の事は大丈夫だ。安心しろ。雪風・・・」
摩耶「何、馬鹿言ってんだ！そんなボロボロで大丈夫な訳無ぇだろ？」
浜風「ハ、ハハハ・・・すいません・・・」
雪風「違うんです摩耶さん！浜風は雪風の為に・・・」
摩耶「雪風！お前もあんな無茶しやがって！」
浜風「摩耶さん！違います！雪風は私の為に・・・！」
戦場のド真ん中で、お互いを必死に庇い合う二人の姿に、怒ることもできない。怒りを通り越して呆れる程。
摩耶「・・・・・あーも！分かったから！お前らの仲の良さはイッタ～い程伝わってるから！」
浜風「べ、別にそういう事を言っているんじゃ・・・」
反論しようする浜風を手で制す摩耶。そして戦闘中である赤い戦

士の方に目を向ける。
摩耶「なんだよ・・・アイツ・・・めっちゃ強えじゃねぇか・・・」
加古『おおう・・・ヤバイよヤバイよ・・・』
浜風「・・・ですが、これはチャンスですね・・・」
摩耶「・・・！そうだな・・・！」
摩耶は耳に装着している無線に触れる。
摩耶「北上！大井！聞こえるか？」
北上『ん～？聞こえるよぉ』
大井『こんな近くにいるのに無線ですか？』
摩耶「あぁ、自分達の状態を教えてくれ」
北上『北上、大井っち共に健在だよぉ。まぁ、馴れない対空射撃で弾が残り少ないけどね・・・」
大井『私も北上さんと同じです。そんな分かりきった事何故聞くんです？』
摩耶「そうか・・・、じゃあ魚雷の方はどうなんだ？」
大井『魚雷？まだありますけど？』
北上『あぁ～、そういえばあまり使ってなかったねぇ。対空ばっか目がいってたよぉ。えへへ』
摩耶「お、おいおい・・・雷巡が魚雷使わないでどうすんだよ・・・たく・・・」
大井『な!?失礼ですね‼私達を雷撃しか取り柄がない人だと思わないで下さい!!』
北上『え？私達って、それが取り柄でしょ？』
大井『えぇ!?北上さぁん!?』
摩耶「はいはいはい！分かったから静かにしろよ・・・！お前達が魚雷を残してくれていたのは幸運だ・・・！」
大井『・・・!!、反撃ですか？』
摩耶「・・・あぁ、こちとら手痛い奇襲を受けてやったんだ・・・、それ相応の礼はしないとな・・・!!」。
北上『・・・リョウカ～イ。負けっぱなしは嫌だしね・・・！』
加古『アイツら！赤い奴の戦闘に夢中で周りを全然見ていないぜ！

ありゃ恰好の的だな！ヒヒ！』
・・・・・ほんの数時間前に自身が〝恰好の的〟にされてた事を忘れているのだろうか？加古以外の艦娘達が少し心配になる。
大井『・・・・・』（ジト目）
北上『ハ、ハハハ・・・』（汗）
摩耶「・・・と、兎に角だ！これより反撃を開始する！雷撃戦・・・用意！」
静かに闘志を燃やし動きだす摩耶達。己の魚雷を装填しながら、反撃のチャンスを今か今かと待つ。
摩耶達が反撃の機会を待つ中、赤い戦士とツ級の戦闘が続いていた。
格闘戦で苦戦するツ級は、堪らず赤い戦士から距離を取る。
ツ級「キサマァ・・・！ふ、ふざけんな・・・！ふざけんなよぉ!!」
ガッチャン！
ツ級は腕の大砲を赤い戦士に向けた。格闘戦は不利と思ったのか、砲撃戦に移ろうとする。
赤い戦士は、ツ級の大砲に怯む事なく、真っ直ぐツ級に突っ込んでいった。
ツ級「来いよぉ!!蜂の巣にしてやらぁ!!」
ツ級は赤い戦士に向け、大砲を打つ。
――ドン！ドン！ドン！――
だが、赤い戦士は、ツ級の放つ砲弾を右に左にと難なくかわしていく。そしてどんどん間合いを詰めていく。
ツ級「・・・っちぃ!!」
赤い戦士が、ツ級に触れるか触れないかの間合いに近づいた。その時、ツ級は大砲を海面に向け砲弾を放った。
赤い戦士「・・・!?」
その瞬間、赤い戦士とツ級の間で大きな水柱があがった。お互いの姿を完全に隠してしまう大きな水柱は、赤い戦士の動きを止めるには十分だった。
ツ級「ギャハ～！引っ掛かりやがったなぁ!?」

そう叫びながらツ級は、止まった赤い戦士の水柱に向かって渾身の右ストレートを繰り出す。ツ級の強烈なストレートが水柱に大きな風穴が空けた。

だが、そこに赤い戦士の姿はなかった。

赤い戦士「・・・どこを見ている？」

ツ級「なっ!?何ぃ?!」

側面から声がする。ツ級が振り向いた時には、赤い戦士の脚がツ級の顔面にメリ込んでいた。

ツ級「んぐはぁ!!」

赤い戦士の強烈なハイキックを顔面にくらったツ級は、水面を跳ねる水切りの小石の様に吹っ飛んでいく。

そのツ級のやられる様を見ていた仲間の深海棲艦達、特に駆逐艦のイ級は動揺を隠せずにいた。

イ級「お、おい！ツ級が押されているぞ!?どうすんだよ!?援護しないとヤバイんじゃねぇか!?」

慌てるイ級とは対称的に駆逐艦ロ級は余り乗り気じゃなかった。

ロ級「だけどなぁ・・・、ツ級ってケンカの邪魔したらマジキレるからなぁ・・・」

ホ級「・・・触らぬツ級に祟り無し・・・だ！」

ヌ級1「そうねぇ・・・、助けて～って来たら援護すればいいじゃない？」

イ級「そ、そう言うもんなの・・・？」

ロ級「そう言うもん、そう言うもん！ヌ級2号！どっちが勝つか賭けてみないか？」

ヌ級2「ヌフフフン！ツ級が勝つよ！異論は認める！」

イ級「認めるのかよ!!」

ヌ級2「後、一つ言いたい事がある」

ロ級「ん？なんだよ？」

ヌ級2「艦娘の奴らがこちらに向けて魚雷を打ってきた」

ロ級「へぇ・・・・・・へェ!?!?（。◇。；ノ）ノ」

ヌ級2「只今、超接近中!!避けなきゃ死ぃヌ!!」

ロ級「そう言う事は早く言えぇぇぇ!!」
イ級「か、回避行動を・・・」
――ドオオオオン!!――
ヌ級2「ぬきゅうううううん!!!（被弾）」
イ級　ロ級「2号おおおおおお!!!」
ホ級「2号が殺られた・・・か！」
――ドオオオオン!!――
ホ級「ほきゅうううううう・・・・・んん!!!（被弾）」
イ級　ロ級「ホ級うううううう!!!」
巧妙？なる奇襲であった。
深海棲艦達は、赤い戦士とツ級の戦闘に気をとられ、雷撃への反応が遅れた。正に慢心。その慢心により艦娘の雷撃がヌ級2号とホ級に直撃。深海側は軽巡1隻と軽空母1隻を失った。
イ級「い、一旦距離を取ろう！このままじゃオレ達もやられちまう！」
ロ級「そ、そうだな・・・！ヌ級1号！後退する・・・」
ツ級「おぉい、ごらぁっ!!!」
ドスの効いた声で呼び止められる。イ級とロ級が振り向くと、怒りに震えるツ級の姿があった。顔は強烈なハイキックを受けた為か、頭の装甲が酷く歪んでいた。
イ級　ロ級「げぇ!?ツ級!?」
ツ級「てめぇら・・・！何、俺の許可なしに逃げようとしてんだ・・・あぁん!?」
イ級「い、いや!?違いますよぉ!?自分達はツ級さんの闘いの邪魔をしない様にって・・・ねぇ？」
ロ級「そ、そうですぜ！そしたら艦娘の連中がいきなり魚雷を打ってきやがって・・・態勢を立て直す為にちょっと下がろうかなって・・・ねぇ？」
ビクビクしながら説明するイ級とロ級だが、怒り狂うツ級が聞く耳を持つ訳がなく・・・。
ツ級「あぁん!?言い訳なんざ聞きたくねぇんだよ!!!艦娘が打ってき

たぁ!?やり返しゃ良いだろうが!!!!」
ロ級「そ、その為に一旦後退しようって・・・ね？」
ツ級「アホか!?ヤツらは、さっきの戦闘で消耗しきってんだろうが!!満身創痍なんだよ!!わかってんのか!?」
イ級「ツ級さんもなかなかの満身創痍っぷりですが・・・」
ツ級「あぁん?!」
イ級「い、いえ・・・なんでもないです・・・」
ロ級「わ、分かったよ・・・、反撃するよ・・・な？な？」
ツ級「・・・分かったならやり返せ!!!アホ共が!!!」
イ級　ロ級「ひぃぃ・・・！」
イ級とロ級、生き残ったヌ級1号も慌てて反撃に移る。もう一対一なんかにこだわっていられない。ツ級はこれまでの鬱憤を晴らす様に、叫ぶ。
ツ級「このクソ共が!!手間かけさせやがって・・・鬱陶しい艦娘も赤いヤツも！全員沈めてやる!!!」
ツ級の怒りの号令を発した。
赤い戦士が身構えた。艦娘達も武器を構える。艦娘達の中には、もう弾薬が殆ど無い者もいる。
だが、それでも今は、先程までの絶望していた自分達は、もう何処にもいない。
どんなに絶望的な状況になっても、もう希望は捨てない。〝皆で一緒に帰るんだ！〟そう決意に満ちた表情を魅せた。
ツ級はそんな艦娘達を見て更に激昂する。
ツ級「ま～だ希望があるとでも思ってんのかぁ!?ふざけんじゃねぇ!!そんな希望も！今！ここで！まとめて水底に沈めてやるよぉ!!!」
ツ級は、腕を振り上げる。イ級　ロ級が構え、ヌ級1号は今ある艦載機を全て放った。ツ級は続けて叫ぶ。
ツ級「油も無ぇ！弾も無ぇ！救援も来ねぇ!!・・・分かんだろぉ!?お前達はもう・・・・・沈むしかねえんだよぉ!!!ギャハァ!!!」
ツ級の腕が振りおろされる。深海棲艦の艦載機らが赤い戦士と艦娘達に向かって突っ込んでいく。

轟音をあげながら突撃する敵艦載機。艦娘達を射程内に捕らえようとした・・・。

1話　その名はセブン　6

――ブルルルルルルルル――
エンジン音。敵の艦載機とは明らかに違う。すると無線から突然、
???『―この子達は!!―』
???『―やらせません―』
――ドドドドドドドドドドドド!!!――
無線から聞こえる二つの声、
そして現れた艦載機達により、敵の艦載機が蚊の様に次々と落ちていく。敵艦載機を圧倒しながら縦横無尽に飛び回る、謎の艦載機達。
その者達の正体は・・・・・、〝紫電改二〟
大井「あれは・・・！」
加古「一航戦の艦載機だ！」
浜風「無線が・・・届いてたんですね・・・よかった・・・」
雪風「摩耶さん！助けが来ましたよ！」
摩耶「・・・よし！」
味方の到来。紫電改二の持ち主である一航戦赤城と加賀が弓を構え、こちらに向かってくる。その後方からは、金剛型４姉妹の金剛・比叡・榛名・霧島、更には二航戦の蒼龍と飛龍まで、これ程心強い事はない。
更に無線から声が聞こえてくる。
蒼龍『蒼龍からアマギへ!!摩耶さん達を発見しました！全員無事です!!』
霧島『こちら霧島。こちらも目視で確認しました。さぁ、反撃開始よ!!』
飛龍『・・・!?、あの子達の近くに何かいます！何でしょう？』
金剛『ん～・・・？ホ・・・Ｗｈｙ!?何デスカ!?あのレッドｍｅｎは!?』
謎の赤い戦士に驚く金剛達。
加賀『・・・・・潰しますか？』
赤城『カカ、加賀さん?!』

摩耶「か、加賀さん!!皆!!待ってくれ!!アイツは攻撃しないでくれ!!」
加賀様、いきなりの〝ツブシます〟発言に慌てて無線に割り込む摩耶。摩耶の慌て様に〝榛名〟は、
榛名『??・・・・・・あ！お友達でしょうか？』
比叡『榛名・・・この状況でその解釈はおかしいよ・・・』
榛名『・・・フフ、冗談です♪』
金剛型２番艦比叡のツッコミに、３番艦榛名が軽く笑って誤魔化した。
摩耶は気にせず更に続ける。
摩耶「・・・・・あー、友人じゃねぇが・・・・・恩人だ。だから今は攻撃しないでくれ。頼む」
霧島『赤い生命体・・・奴は味方だと？』
摩耶「あぁ・・・、今のところはな・・・。それよりも深海棲艦の方を頼む！」
金剛『ＯＫ！わかったヨ～!!蒼龍、飛龍！あなた達は赤城と加賀の攻撃に加わって下サーイ!!』
比叡『ね、姉様！そういう指示は！旗艦の霧島の役目です！』
金剛『ｏｈ！そうデスネー！ソーリー霧島！やっちまったデース！』
霧島『い、いえ！私もそう指示しようと思ってた所ですから！蒼龍！飛龍！お願いしますね！』
蒼龍　飛龍『了解！』
霧島『私達は、速やかに摩耶さん達に合流・敵を殲滅します！お姉様方！よろしいですね？』
金剛『イエース！そうと決まればァ！善はハリィアップデース！ＧＯ！ＧＯ！』ザザー！
比叡『よーし！気合い！入れて！いきます！』ザザー！
榛名『これ以上の勝手は！榛名が！許しませーん!!』ザザー！
霧島『あぁ！ずるい！・・・んじゃなくて・・・勝手に突撃しないでー!!姉様方ー!!自重してくださーい!!!』

ザザー・・・・!・・・・プチッ!
摩耶「・・・・・おいおい・・・大丈夫かよ・・・」
摩耶は無線越しに聞こえる、気の抜けた霧島達のやり取りに苦笑した。
だが、やり取りを聞いている摩耶にとっては怒りどころか、安心感を持ってしまう程。
摩耶（ホント、相変わらずだな。あの人達は・・・・・・）
どんな状況でも、あの人達は変わらない。
あんなやり取りが許されるのは、実力と経験を兼ね備えた金剛型姉妹達だからこそ。
摩耶（・・・おっと!あぶねぇあぶねぇ・・・安心するのはまだ早いよな・・・!）
自身の頬を叩いて、再度気合を奮い起たせる。
摩耶（この戦いが終わってからだ・・・!帰るぜ・・・絶対に・・・!!）
決意を新たに、摩耶は眼前の戦場に目を向けた。

ツ級は自身の目を疑った。
先程まで圧倒し追い詰めた自分が、今は逆に追い詰められている。
ツ級「ど、どうなってんだ・・・!?」
ひどく狼狽する。
・・・何でこうなった?・・・何で追い詰められている!?何がいけなかった!?何が足りなかった!?
何が!?何が!?何が!?
・・・背後にいた他の深海棲艦は、散り散りになり、何処に行ったのかも分からない。逃げたのか、はたまた沈んだのか。
だが今のツ級には、もうどうでもいい話だった。
目の前の存在を睨みながら・・・そして、一つの結論にたどり着く。
ツ級（コイツがぁ・・・!!!）
すべてを狂わせた元凶〝赤い戦士〟
・・・・元はと言えば、コイツが来てから戦況が変わり始めた。駆

逐艦を沈めようとした艦載機を真っ二つにし、こちら雷撃を謎の力で防いで見せた。格闘でも圧倒され、まるで此方の考えを分かっているかの様に自分の攻撃が避けられる。コイツに苦戦している間に、息を吹き返した艦娘達に反撃を受け、そして援軍の到来までも許してしまった。

ツ級（コイツさえ居なければ・・・・・コイツサエイナケレバ・・・・!!!）

目の前にいる赤い戦士を前にして、ツ級は怒りに奮えた。

・・・すると、今まで黙っていた赤い戦士が、

赤い戦士「退け」

ツ級「・・・何？」

赤い戦士「勝敗は決した。お前の仲間も何処にもいない」

赤い戦士が言った通り、ツ級の周りには仲間は一隻もいなくなっていた。

ツ級「・・・・ネェ・・・！」

赤い戦士「・・・ん？」

ツ級「フザケンジャネェ!!!」

ツ級が怒りのままに吠える。

ツ級「情ケヲカケタツモリカァ!?俺ハ負ケテナイ!!貴様ナドニ！俺ガ！負ケルワケネェンダァァ!!」

そう叫びながら、ツ級は赤い戦士に殴りかかった。

赤い戦士「あくまで張り合うつもりか・・・」

赤い戦士は慌てる様子も無くツ級のデカイ拳を片手で難なく受ける。

だが、片手で止められた瞬間、ツ級はニヤリと笑った。そして、自身の使える全ての火力を赤い戦士の頭部に向けた。

ツ級「馬鹿ガ!!喰ラエェェ!!!」

赤い戦士「!?」

ドン!!

ツ級のゼロ距離砲撃が赤い戦士の頭部に命中。だが、ツ級は攻撃を止めない。

ツ級「馬鹿ガ!!馬鹿ガ!!馬鹿ガァ!!油断シテルカラダゼェ!?流石ノ貴様デモ、コレハタマラネェダロォ!?ダガ！止メテヤンネェ!!死ヌマデ喰ライ続ケロォ!!ギャハハハハー!!!」

ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!ドン!!

容赦無い砲撃が赤い戦士に襲いかかる。頭に集中的に攻撃され、赤い炎と黒煙が赤い戦士の頭を包んでゆく。

ゼロ距離砲撃の連発、それも頭部に集中させる様なえげつない攻撃をされては、戦艦級でも只じゃ済まない。

目を覆ってしまいたくなる様な光景に、摩耶達や救援に来た金剛達も息を飲んだ。

黒煙が完全に赤い戦士を包み姿を隠した。

ガチャン・・・！

砲撃を止めたツ級は肩で息をしながら、自分の勝利を確信した。

ツ級（ギ、ギヒヒ・・・ざまぁねえなぁ・・・。ア～ア、右手が馬鹿になっちまった・・・）

ゼロ距離砲撃を敢行したツ級の右腕はボロボロに。

その他の砲身も真っ赤に焼け、熱で形が歪んでしまった物もあった。

ツ級（ここまで散々だったが・・・、この得体の知らねぇ奴は仕留めたんだ。これで勘弁して引いてやろう・・・・・・・）

と、判断するとツ級は自分が作り上げた黒煙に紛れ撤退しようとした。だが・・・、

自分同様にボロボロになった赤い手が未だにツ級の右腕を掴んでいた。

ツ級「・・・・チッ！死ンデモマダ放サネェッテカ？敵ナガラタイシタモンダ。ダガ、俺ガ勝ッタ以上、テメェニハ用ハ無ェ！」

そう言い放ち赤い手を振り払おうと力を入れる。

だが・・・離れない。離れるどころか、尋常じゃない力で掴まれて右腕が動かす事ができないのだ。

ツ級「!?ウ、動カネエ!?コイツハ死ンデイルハズダゾ!?ナノニコン

ナ・・・!?ドウナッテヤガル!?」
必死に引き剥がそうとするツ級。
すると、更にもう一本の手が黒煙の中からヌッ!と現れ、ツ級の今度は左腕を掴んだ。
そしてその黒煙の中でギラギラと一際輝く2つの光が・・・ツ級をジッと睨んでいた。
ツ級「ヒッ!?」
赤い戦士「・・・・・いてぇな、この野郎（怒）」
ツ級の両腕を掴んで動きを封じる赤い戦士。
ツ級「ハ、放セ!!!」
必死に引き剥がそうとゲシゲシと蹴りを入れるが赤い戦士は動じなかった。
赤い戦士「直ぐに放すさ・・・!」
と言うと赤い戦士は、両腕の力だけでツ級をそのまま宙高く持ち上げる。
ツ級「アワ!?アワワワワワ!?」
赤い戦士「まずは・・・お返しだ・・・!」
すると赤い戦士は体を回転させ、ハンマー投げの様にツ級を振り回し始めた。その回転速度が異様に速い。
ツ級「ギ・・・ギヒャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!」
赤い戦士「・・・」
ウルトラ式ジャイアントスイングの影響で、立ちこめた黒煙がみるみる内に晴れていく。
黒煙が晴れたことによって周りにいた摩耶達や金剛達がその状況を見て驚いた。
摩耶「な!?何やってんだアイツは!?」
金剛「ワーオ（棒）スンゴークハヤーイデース（棒）」
比叡「な、何これ・・・凄い・・・風が・・・ヒエェ・・・s」
霧島「くっ!少し後退しましょう!あれが飛んできたらどうなるか・・・!」

雪風「ゴー♪ローク♪ナーナ♪ハーチ♪クーウ♪・・・」
〝なんか楽しんでるぅ!?〟と一同が雪風を見る。
そんな艦娘達を余所に、赤い戦士はそろそろフィニッシュを決めようとしていた。
ツ級「マ!?待テ!?」
赤い戦士「そろそろ解放してやる」
回転が更に速くなる。・・・そして、
赤い戦士「デュウウウウウア!!!」
ツ級「ギヒャアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!?」
勢いそのままにツ級を投げ飛ばした。高角度で投げ出されたツ級はキレイなアーチを描きながら、水面に激しく叩きつけられる。頭をクラクラさせながら、何とか体を起こすが、まだ脅威は終わらなかった。
ツ級を投げた後、赤い戦士は頭上にある自身の得物〝アイスラッガー〟を両手で挟む様に構えると、
赤い戦士「ディィア‼」
ツ級に向けて力を解き放つ。
すると、アイスラッガーはそれに応える様に、キラリと光を放ち、ツ級にめがけ回転しながら勢いよく翔んでいく。
ツ級はダメージを回復する暇も無く、アイスラッガーが翔んでくる。超低空で翔んでくるアイスラッガーはツ級の懐に近付くと、下から上へツ級を切り上げる様に襲いかかった。
ツ級「!?!?」
ツ級は何とか体を仰け反らし避けようとするが、反応が遅れた為に腹部に衝撃が走った。何とか直撃はまぬがれたが・・・、
ツ級「痛ゥ!!」
ツ級は腹部に痛みを感じる。そこに目をやると・・・、
下腹部から胸にかけてパックリと亀裂が走っていた。亀裂から少量だが油らしき液体が漏れ出ていて、その亀裂の奥からは絶対に見えてはいけない様な物が見え隠れしていた。後、もう少し反応に遅れたら・・・・、

ツ級「・・・・・・・・・・・――――!」
声にならない声を発するツ級。ここに来てやっと自分はとんでもない相手にケンカを売ったんだと気づく。
アイスラッガーを戻した赤い戦士がツ級をジッと睨んでいた。
ツ級「ア・・・ア・・・」
恐怖するツ級に向け、赤い戦士はある構えをとる。
右手を縦に左手を横に、右肘を左手の甲に乗せてL字の形に構えた。その構えを見てツ級はゾッとした。
ツ級（・・・ヤバい・・・・!何かヤバいのが来る・・・・!そんなの受けたら・・・・・・・!俺は・・・!!）
この後に待つのは〝死〟
ツ級は自分自身の死の危険を感じると、すぐに動いた。
ツ級「マ、待テ!!降参ダ!降参スル!」
ツ級は、慌てて両手を挙げながら宣言した。突然の降伏宣言に、周りにいた艦娘達が只々驚いた。
雪風「こ、降参!?」
摩耶「おいおい、深海棲艦が降参するって聞いたことねぇよ」
北上「・・・しかもお、あんなに勝ち気だった深海棲艦が降参するって・・・ねぇ?」
大井「北上さんの言う通りです!明らかに何か企んでますよ!絶対!」
浜風「・・・・・」
艦娘達は、警戒を解くことはなかった。
今までに艦娘と深海棲艦の間では、長年に渡り壮絶な戦いを繰り広げてきた。互いに撃沈、轟沈を繰り返しながら戦っていたが、降伏させて勝敗の決すると言うのは、前例はなかった。前例がない事であり、ましてや降伏する深海棲艦がよりによってツ級である。
艦娘達の反応は最もであった。
ツ級「約束スル!モウ、オ前達ニハ刃向カワナイ!絶対ニダ!約束スル!コノ通リダ!」
両膝をついて必死に助命を懇願するツ級を見て艦娘達は、

加古「こんな必死に言われると・・・、ねえ？」
雪風「だんだん可哀想になってきますね・・・」
浜風「そ、それはそうですが・・・」
少しずつ緊張が緩み始めていた。だが、そんな状況を一喝するかの様に、
加賀「あら・・・ずいぶん甘いわね？」
雪風「え？」
振り向くと、一航戦　加賀がツ級に向け弓を引いた状態で立っていた。加賀は更に続けた。
加賀「あれだけ追い詰められたっていうのに・・・相手が可哀想になったから見逃すの？・・・もし私達が助けに来なかったら可哀想になってたのは貴女達よ？そんな状況、相手は見逃すかしら？」
加古「そ、それは・・・」
加賀「答えは・・・否・・・奴らが見逃す訳がない」
赤城「・・・加賀さんの言う通りです」
加賀の隣にいる赤城も同じく、弓を引き絞っていた。
赤城「私達は、国の防衛そして脅威の排除を使命に戦っている艦娘です。そんな艦娘が脅威を見逃す様なことがあってはならない。その優しさは・・・〝甘え〟・・・それは、お腹の中に爆弾を入れておく様なもの」
加賀は頷き、更に弓を引き絞りながら一喝する。
加賀「・・・甘い考えは・・・捨てなさい。・・・じゃないと、また貴女達が危険に晒される」
摩耶「・・・アタシ達が奴らに何されたか。今一度思い出して見な。・・・それでも奴らが可哀想に・・・見えんのか？」
雪風「・・・」
加古「・・・」
浜風「・・・」
加賀に一喝され、摩耶に諭され、雪風達は、自身が今までされた事を冷静に思い返す。
燃料・弾薬少なくなった帰投の中、卑劣な奇襲を受け加古が中破し

た、そして浜風は大破し、雪風と共に沈められる一歩手前だった。
今は赤い戦士と救援部隊のおかげで形勢はこちらが有利だが・・・。
もし、あの赤い戦士が来なかったら、少なくとも雪風・浜風はとっくに海の底に沈められていただろう。
もし、ここで奴を見逃しても奴は、他の場所でまた襲うだろう。その時に雪風達の様な事が起こるとは思えないし、その時犠牲になるのは別の艦娘だ。結果、殺らねば殺られる様なこの世界の現実は一つも変わりはしない。
・・・非情だが殺るしかない。雪風達は心に決める。

1話　その名はセブン　7

摩耶「・・・ツ級、残念だが、お前を見逃すわけにはいかねぇな」
摩耶は、此処にいる艦娘全員の意思をツ級に突き付けた。
両膝を付いて懇願していたツ級は、俯いたまま動かなくなる。・・・・・だが、
ツ級「ククク・・・クギギ・・・ギャハハハ!!!」
摩耶「んな!?」
赤い戦士「・・・・・・」
突如、狂った様に笑い出すツ級。笑うたびに腹部の亀裂から油の様な液体がダラダラと漏れ出す。先程よりも多くの量が漏れ出ているにも関わらず笑い続けるツ級の姿に艦娘達は疑念を持つ。
加賀「・・・何がおかしいの?」
不快に笑うツ級に疑念を問う。ツ級は静かに呟いた。
ツ級「ギヒヒヒヒ・・・イテェ・・・ヒヒ・・・ヤッパリ見逃シテクレネエカ・・・」
ツ級は、スッと立ち上がると・・・、
ツ級「忌々シイ艦娘共ガ!イイダロウ!!コノ命!ホシケリャ、オ前達にクレテヤル!ギャハハハハ!」
両手を挙げて応えた。
赤い戦士「・・・・・」
おかしい・・・、　赤い戦士はそう感じた。
今まで勝ち気だった奴が命乞いをし、今はその命を差し出そうとしている。こちらに有利な状況を彼方が作っている。考えが読めない。
赤い戦士（コイツ・・・何を企んでいる・・・?）
ツ級の考えを何とか読み解こうとする赤い戦士。
その後ろで摩耶達の壁になって守る救援部隊。その旗艦　霧島も考えは一緒であった。

霧島（あのツ級を途中から見てるけど、簡単に自分の命を差し出すとは思えない。摩耶さんも同じ考えの様だし・・・何かやってくるはず・・・！）

そう思いながら霧島は、自身のメガネをそっと掛け直す。

霧島（考えて！考えるのよ！霧島・・・！・・・相手の状況で考えて！・・・私が・・・アイツだったら・・・！）

頭をフルに回転させて考える。

ツ級「ダー・・・ケー・・・ドー・・・・・」

ツ級は、両手の親指を下に向け・・・叫んだ。

ツ級「・・・・・テメェ達モ・・・、道連レダァ!!」

ツ級の叫びと共に、背後から水しぶきが舞った。

ロ級「海ノ中カラ、コンニチハ～!!ソシテ、死ネ!!」ドォン!!

イ級「イ級！イキュノ!!」ドォン!!

比叡「ヒエ～!?!?!」

榛名「!?・・・痛っ！」

赤い戦士（・・・狙いは奇襲か・・・!!）

駆逐艦のロ級とイ級が突如海面に出現。艦娘達の背後から襲いかかる。比叡と榛名が被弾してしまう。

赤城「な!?討ち漏らした!?」

加賀「くっ！」

金剛「ＮＯ！慌てちゃダメデース！あんな砲撃で沈む程、戦艦はそんなヤワじゃないヨー！比叡！榛名！反撃デース！」

比叡「はい！姉様！このぉ！よくもやったなぁ!!」

榛名「勝手は！榛名が！許しませ～ん!!」

突然の奇襲にも冷静に対応していく金剛。比叡と榛名もそれに見習い、直ぐ様反撃する。

ロ級「オワッ!?」

イ級「ハワワ!?」

艦娘の反撃に対し、何とか食らい付くイ級とロ級。だが、戦艦二隻に対し駆逐艦二隻では、力の差が歴然である。

イ級「堅イィ！堅イヨォ！アイツラァ！砲撃モ怖エェ！・・・カエ

リタイ・・・！」
ロ級「ウッセェ!!ソレデモ駆逐艦カ!?ウチラニハ一発逆転ノ〝魚雷ちゃん〟ガ　アルジャネエカ!!」
イ級「オ、オウ！ソウダッタ！ジャア早速!?」
ロ級「オウ！ウチノ合図デ行クゼ！」
そうロ級が言うと、雷撃の準備をする。そして砲撃の雨が微かに止んだ間を見計らって、
ロ級「今ダ!!!」
ロ級の合図と共に、イ級とロ級は持てる全ての魚雷を艦娘達に向け、放った。
比叡「!?敵の魚雷が接近中!!」
榛名「魚雷の数が多すぎます!?」
金剛「ｓｈｉｔ!!・・・・・比叡！榛名！あの魚雷達を可能な限りデストロイしてくだサーイ!!・・・最悪、ミーと一緒にＷａｌｌ（壁）に！」
赤城「金剛さん!?」
加賀「貴女・・・!?」
摩耶「お、おい!?マジで言ってんのか!?」
金剛「ＮＯｐｒｏｇｒａｍ（問題なし）!!ユー達は、ユー達の事してくだサーイ!!・・・言ったデショ？戦艦はそんなにヤワじゃないヨ？」
金剛は、赤城達に対し、パチリッとウインク。
比叡「はい！金剛姉様！気合！入れて!!止めます!!」
榛名「はい！榛名も頑張ります！」
各々が気合を入れ直し、魚雷を砲撃で破壊していく。何本かの破壊に成功したが、やはり数が多すぎた。魚雷を砲撃し破壊する事は至難の業であり、それが複数となると全ての破壊は、ほぼ不可能である。
残り何本かは、金剛達に襲いかかる。だが、避けると言う選択はなかった。避けたら後ろの仲間に被害が及んでしまうからだ。
避けることが出来ないと分かって、そこを狙ってきたのだろう。壁となる自分達に確実にダメージを与える為か。卑劣に思えるが、この

時だけは相手が一枚上手だったのだろう。ここは、覚悟しなければならない。
金剛は檄を飛ばす。
金剛「残りは、受け止めマース!!衝撃に備えて!!」
金剛達が身構えた瞬間、背後から赤い戦士が飛び出して来た。
金剛「ｗｈａｔ（何）!?」
赤い戦士「―・・・ジュア!―」
驚愕する金剛達の前に立つと、赤い戦士は腕をクロスさせ、何か念じ始めた。
比叡「い、一体何をする気!?」
すると、目の前の海面から何かが浮かんでくる。それは、ロ級とイ級の放った魚雷。黒光りするソレは、全て停止。爆発すること無く、次々と海面から浮き出てきた。
イ級　ロ級　金剛　比叡　榛名「「「う、うそ～ん・・・(汗)」」」
目の前の異様な光景に困惑する各々。
それを気にせず赤い戦士は、チラッと二人へ視線を向ける。二航戦の蒼龍と飛龍である。二人は何かを察した。
蒼龍「・・・な、何が起きたのか、よくわかんないけど！飛龍!!」
飛龍「え、えぇ！わかってる！全機!!あの魚雷へ攻撃開始!!」
蒼龍と飛龍は、赤い戦士の考えを察すると、上空にいた自身の航空隊で、海面に浮き出た魚雷を次々と破壊し無力化していった。
赤城「い・・・一体・・・何が起きたんでしょうか・・・？」
加賀「・・・とにかく、二航戦のお陰で最悪の事態は避けられました。・・・赤城さん？」
赤城「ええ、そうですね・・・。加賀さん！反撃を！我ら一航戦の誇り！今こそ、御見せしましょう!!」
加賀「はい、撃ち漏らしたままでは帰れません・・・！」
二人は互いに頷くと、イ級とロ級に向け再度弓を引いた。
赤城「第二次攻撃隊！全機発艦!!」
加賀「鎧袖一触よ。心配いらないわ」
一航戦の二人から放たれた矢は、無数の艦載機に変貌し飛翔する。

イ級「ア、アレ？・・・何カ、ヤバクナイ？・・・ロ級？・・・残弾ハ？」
ロ級「・・・（フルフル）・・・イ級ハ？」
イ級「・・・（フルフル）・・・」
ロ級「アァ・・・ソウ？ジャア・・・・・ア・・・」
一航戦の航空隊がイ級とロ級に向け爆撃を開始。
イ級　ロ級「キュ、キュウウウウウウンン!!!（被弾）」
赤城と加賀により、深海棲艦の駆逐艦二隻は!!!爆発と共に海中に消えていった。
赤城「・・・よし！」
加賀「やりました」
見事、敵を撃破し、赤城は小さくガッツポーズをする。加賀もクールな表情だが微かに笑みを見せる。
金剛「・・・ＮＯ～!!私達の見せ場を盗らないでクダサ??イ!!」バシャバシャ・・・
比叡「お、お姉様！良いじゃないですか！被害が無かったんですから・・・」
榛名「は、榛名は大丈夫ですから！・・・ね？」
一方金剛は、自分の活躍の場を奪われ、地団駄を踏んでいた。それを比叡、榛名の妹達がなだめている。
そんな光景を見ていた摩耶は、
摩耶「・・たく、心配したコッチが、バカみたいじゃねえかよ・・・」と、ため息をはく。
それを見て北上と大井が、摩耶の側に近づいて、
北上「まあ、被害は無かったんだし・・・結果オーライってことで良いじゃん！」

北上は、そう言いながら摩耶の肩をポンポンと叩く。
摩耶「ま、まあ、そうなんだけどよぉ・・・」
大井「全く、素直じゃないですね。・・・ちゃんと喜びなさいな」
摩耶「ハア!?お前に言われたかねーし!!」

大井「ハア!?」
そして、重巡洋艦と重雷装巡洋艦がギャーギャーと言い合いを始めてしまった。
その光景を良く思わない者がいた。案の定、奇襲を仕掛けた軽巡ツ級である。表には出ていないが、内心、腹わたが煮えくり返っていた。
ツ級（こ、コイツらぁ・・・マジでナメてんのかぁ・・・!?今まで戦ってきて、こんな屈辱は初めてだ・・・!!!）
ギリギリと拳を握りしめた。
ツ級（・・・まぁいい。そのまま馬鹿みたいに騒いでな・・・。これからテメェらの顔が・・・絶望に染まるんだからよぉ・・・ギヒヒ・・・）
ツ級は、握りしめた拳を、そのままある方向に向けて構える。腕の砲塔がギチギチと動く。赤い戦士との戦いで、もう殆どの砲塔が熱で曲がったり破損して使い物になっていなかった。だが、まだ一つだけ使える砲塔が残っていた。・・・いや、残していたのだ。その砲塔の中には一発の砲弾が既に装填されていた・・・。その一発が、自決用になるのか、はたまた一矢報いる為に放つのか。
ツ級は迷わず後者を選んだ。
・・・このまま沈むのなら誰でもいい。誰かを道連れに・・・。
・・・認めたくないが・・・艦娘達は強い。一人一人の強さではない。仲間を助け合おうとする艦娘達の結束した力がとてつもなく強いのだ。
故に・・・脆い。結束は強いが、それが一つでも欠ければ直ぐに崩れる。だから、狙う。艦娘の誰かを道連れに沈め、ヤツが絶望に染まり、泣き崩れる様を眺めながら沈んでやる。
ツ級「ソノ、生贄ニナルノハ・・・」
歪んだヘルメットの中で、ニタァと笑うツ級の先にいるのは・・・、
浜風「・・・・・!?」
大破した浜風だった。
イ級　ロ級の奇襲に気を取られ、浜風の守りが少しだが甘くなっていた。赤い戦士も金剛達を雷撃から守る為、短い時間だが浜風達から離れてしまっていた。

今、大破した浜風の側にいる者はいなかった。。
先程まで側にいた雪風も、奇襲に気を取られ、浜風が狙われている事に気づいていなかった。
そんな狙いやすい状況を見逃すツ級ではなかった。
・・・時間がゆっくりと流れる・・・、
浜風も自分が狙われている事に気づくと、自身が持っている高射砲をツ級へ向ける。
浜風（・・・!!ただでは・・・沈みませんよ・・・!!）
ツ級（・・・へぇー、オモシレェ!!!）
この状況に艦娘達が気づき始め、浜風を守ろうと動く。だが・・・、遅かった。
ツ級の砲台から既に砲弾が解き放たれ・・・、浜風の姿を爆風が覆い尽くしていた。
ツ級「ジャアナ!!駆逐艦!!アッチデモ仲良クシヨウゼ!!!ギャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ!!!」
最後の仕事をやり終えたツ級はモクモクと上がる黒煙を眺め、満足気に笑った。
???「・・・あら?・・・いったい誰の事を言っているんでしょうか?」
ツ級「・・・・・・ナッ!!???」
???「・・・残念ですが、今・・・当たったのは駆逐艦ではなく・・・」
いきなり黒煙の中から、知的だが少しドスの効いた声が聞こえる。
黒煙が次第に晴れていく・・・。そして、その場にいたのは・・・、
霧島「・・・戦艦・・・ですよ?」
戦艦　霧島だった。被弾したスカートに付いた煤を手で軽く払う。
ツ級「ナッ!?ナゼダ!?アノ駆逐艦ニテメェ達ノ守リハ完全ニナカッタハズ!?」
霧島「・・・確かに、貴方は、金剛お姉様達の隙を見逃さず攻撃しました。敵ながらアッパレと言うべきでしょうか・・・」
パンッパンッと、軽く手を叩く霧島。
霧島「ですが・・・、貴方の状態、この状況、そして・・・私の戦

況分析にかかれば、貴方が一矢報いる為に、手短な浜風さんを轟沈に追い込もうと考える事は・・・・・、そう！明・白!!!」
そして、霧島はツ級に対し、指を指して高らかに叫んだ。
霧島「この霧島にかかれば!!!貴方の考えなど!!ツルッと！マルっと！お見通しよ!!!」（・・・いーよし！決まった！）
ムフーと、鼻息を荒くしながら眼鏡を直す。
ツ級「キイイイイサアアアアマアアアアアアア!!!!!コロス!!コロス!!コロス!!コロス!!コロス!!コロス!!全員ココデ!!ブッコロシテヤル!!」
何が外れた様に怒り狂うツ級に対し霧島は、
霧島「・・・観念しなさい。我が仲間の無念、今こそ晴らさせていただきます!!」
浜風「・・・霧島さん・・・まだ・・・私・・・死んでませんよ・・・・・」
霧島の背後で浜風が言った。
それを聞いた霧島はツ級に睨みを効かせながら、
霧島「・・・ご、ごめんなさい（汗）・・・べ、別にそういう意味で言ったつもりでは・・・」
浜風「・・・分かりました・・・。では、少しの間そのまま動かないでいてくれますか？」
霧島「え？・・・・あ、はい？」
霧島は、え？何で？と、言った顔をする。何故動いてはいけないのだろう？疑問に思った。
だが、その疑問は直ぐに解決した。
――ドオン!!!!――
・・・・・霧島の股の下から轟音が響いたのだ。
浜風はツ級に砲塔を向けられる。それに対し、自分がしたことは、持っている高射砲をツ級に向けることだった。思うように動かない体に鞭打って、高射砲を持ち上げた。
だが、直ぐに悟ってしまった。
―自分は沈む―と・・・、
実際にツ級から砲弾が放たれたのが見えた。
全ての光景がゆっくり動いてる様にに感じた。

近づいて来るツ級の砲弾。浜風に気付き、駆けつけようとする仲間達。赤い戦士も向かってくる。だが、遅い。
仲間達よりも、赤い戦士よりも速く、ツ級の砲弾が自分を貫くだろう。
浜風は、静かに目を閉じた・・・。
・・・激しく響く爆発音、肌が焦げるほどの爆風・・・だが、体を貫かれた感じがしなかった。？と思った浜風が目を開くと・・・戦艦霧島が目の前にいた。ツ級の砲弾を、体で受け止めた霧島は立ち籠める黒煙の中、こちらに向かって笑ってみせた。〝心配ない〟そう語りかける様に。
あぁ・・・、また助けられてしまった。浜風は思った。
自分が力不足のせいで大破したのに・・・、皆は嫌な顔せず自分を必死に守ってくれて、更には謎の赤い戦士に守られて・・・。
浜風（私は・・・、皆に迷惑かけてばかりだな・・・）
浜風は、高射砲を握りしめる。そして、何か決意する様に、静かに行動に移る。大破した自分ができる事は限られている。その限られた行動の中で、
・・・・・あのツ級を・・・!!
今、大破で動けない。頼れるのは、自身が持っている高射砲のみ。霧島がツ級に向け、挑発をしてくれているお陰で、ツ級の注目は霧島に向いている。
浜風は静かに体を倒す。服が濡れても気にしない。どうせ、大破して着ていない様な物だ。
水面ギリギリまで高射砲を下げる。そして、ある所からゆっくりと狙いを定める。霧島の股の下からだ。
おそらく撃ったら霧島は驚くだろう。だが、今の状態でツ級を狙えるのは、霧島の足の間からが一番なのだ。
狙いは定まった。失敗できない。一発勝負でケリをつける。浜風は静かに、そして必死に念じた。
浜風（私だって、守られてばかりいられない・・・！皆で帰る為に、この一発に全てをかける!!お願い・・・!!）

――当たれ!!!!!――

――ドォン!!!!!――

霧島「・・・ギャヒィ!?」

霧島の股の下から、轟音と共に、砲弾が飛び出した。飛び出した砲弾は、浜風の願いと共に、一直線にツ級へと飛んで行く。そして、その願いが叶ったかの様に、浜風の砲弾は、ツ級の体、腹部にできた大きな亀裂に吸い込まれる様に着弾、ツ級の内部で大爆発を起した。

ツ級「ギッ・・・ギギャアアアアアァァ!!!!!」

ツ級は、いったい自分に何が起きたのか、全く理解できなかった。霧島という戦艦の挑発にのったばかりに、ツ級は浜風の砲弾に気づくことができなかった。気づいた時には既に遅く。砲弾が体を貫き、亀裂からおびただしい量の液体が溢れ出す。その液体に引火しツ級の体は炎に包まれてしまった。

炎に包まれてながらツ級は、自分をこの様な状態にした存在、浜風をじっと睨み、そして叫んだ。

ツ級「ウッ・・・ウガァ・・・!!!クッ・・・駆逐艦ゴトキニィ!!!・・・認メネェ・・・認メネェゾォ・・・!!!」

浜風「・・・・・その駆逐艦ごときに、貴方は沈められるんです。それは先程までのお返しです。・・・・・駆逐艦を舐めないで!!!」

ツ級「クッ・・・クソ野郎ガァァァァァァ!!!!」

沈みかけるツ級、最後の力を使って浜風に襲いかかる。

だが、そんなツ級の前に立ち塞がる者がいた。あの赤い戦士だ。

赤い戦士「――・・・・・ジュア!!!――」

赤い戦士は、再び両腕をL字の型に構える。そして、L字に構えた腕から極太の光線――ワイドショット――がツ級に向け解き放たれた。

ツ級「コッ・・・コンナ奴ラニ・・・、オッ・・・俺ガ!!・・・俺ガァ・・・・・!ギ・・・ギャアアアアアアアアアア・・・・・・!!!!!!」

ツ級は赤い戦士のワイドショットに撃ち抜かれ、大爆発。断末魔と共に、海に沈んでいった。

1話　その名はセブン　8

赤い戦士「・・・・・」
ツ級を仕留めた赤い戦士は、空を見上げた。
摩耶「・・・おい、赤いの」
不意に呼び止められ、赤い戦士は、呼ばれた方を見る。すると、赤い戦士を睨む摩耶がいた。金剛達や一航戦　二航戦も赤い戦士に対し、未だに警戒をしている。
摩耶「あんた・・・何者だ？艦娘には見えねぇが・・・何処の所属だ？」
赤い戦士「・・・・・」
霧島「貴方が私達を助けてくれた事は、大変感謝いたします。ですが・・・貴方の様な特殊な方は、過去に見たことがありません・・・」
金剛「いくつかＱｕｅｓｔｉｏｎ(質問)したい事がありマース。だから・・・私達の鎮守府に来てほしいデス」
榛名「・・・別に、貴方を捕まえて解剖しようとか思ってませんから、ご安心下さい♪」
比叡「榛名・・・その言い方は、逆に警戒するよ・・・」
榛名「・・・・・ふふふ♪」
榛名は、笑ってごまかす。それに対し、赤い戦士は、只黙って艦娘達を見ていた。
赤い戦士「・・・・・・」
北上「う～ん？」
大井「無口な人ですねぇ・・・」
加古「・・・もしかして、アタシ達の言葉が分かんねぇのか？」
赤い戦士に対し、コミュニケーションを取ろうとする艦娘達。だが、赤い戦士は黙ったままだ。
それに対し、耐えられなくなった加賀が、
加賀「こちらに対し、只々無視とは、どういう事かしら？何か喋ったらどう？その方が貴方の為だと思うけど？」
警告を発しながら、赤い戦士に対し、弓を構える。

赤城「加賀さん!?」
摩耶「おい!?やめろ!!」
慌てて止めようとする赤城と摩耶。それよりも先に、加賀の前に立ちはだかって止める者がいた。雪風だ。
雪風「やめてください!!」
加賀「どきなさい・・・雪風・・・」
雪風「どきません!!この人は、私達を助けてくれた命の恩人ですよ!?加賀さんだって!この人に、助けてもらったじゃないですか!?」
加賀「・・・そ、それは・・・」
雪風「雪風知ってます!!加賀さんがやっている事は〝恩を仇で返す〟って言うんですよ!!」
加賀「な・・・!?」
雪風「加賀さん!!・・・もし、この人に痛いことをしようとするなら!・・・この雪風が許しません!!」
加賀「・・・くっ・・・」
雪風が鼻息を荒くしながら、必死に加賀から赤い戦士を守ろうとする。流石の加賀も少し動揺するが、それでも弓を降ろそうとしない。
味方同士で睨み合っている二人を見て、赤城と摩耶は、ため息をついて天を仰ぐ。
すると、突然赤い戦士が、自分を必死に庇う雪風に近付いた。その動きに全員が一瞬身構える。
雪風は、すぐ横にいる赤い戦士に少し驚く。だが、すぐに赤い戦士に対し、
雪風「大丈夫!!貴方は、雪風が守ります!!」
と、笑顔をみせる。
赤い戦士は、笑顔をみせてくれる雪風に、
赤い戦士「・・・・・」ポンポン
雪風「・・・?」
頭を撫でて答えた。それは、まるで―ありがとう―そう言っているかの様に。
赤い戦士は、雪風の頭から手をおろすと、再び天を見上げ、

赤い戦士「―・・・・・デュア!!―」
目にも止まらぬ速さで青空に消えていった・・・・・・。
摩耶「・・・あちゃー・・・逃げられちまったな・・・・」
霧島「・・・まさか、空を飛ぶなんて・・・・」
蒼龍「しかも何よ、あの速さ・・・」
飛龍「私達の艦載機じゃ到底追えないよ・・・」
北上「あ～、霧島さん達は知らないんだよねぇ・・・アイツ～空から飛んで来たんだよぉ？」
比叡「そ、そんなバカな!?人が空を飛ぶなんて・・・」
大井「北上さんの言う通りです。実際見ちゃったんだから、しようがないでしょ？」
浜風「た、確かに・・・」
加古「だよな～・・・しょうがないよな～・・・」
雪風「・・・・わぁ・・・・」
赤城「・・・本当、よく分からない人でしたね・・・加賀さん」
加賀「・・・ええ・・・そうね・・・」
赤い戦士の飛び去った空を見つめる摩耶達。
すると、金剛が、ぱんっ！と手を鳴らす。
金剛「ＨＥＹ!!皆さ～ん？物思いにふけるのは、ここで終わりデース!!榛名！」
榛名「はい！皆さん？まだ任務は完遂されていませんよ？」
金剛「ＹＥＳ！鎮守府に帰るまでが任務デース!!忘れちゃＮＯ！なんだからネェ～？」
霧島「・・・そう・・・ですね。了解です！・・・では、金剛お姉様！」
金剛「ハーイ!!」
霧島「金剛お姉様と比叡お姉様は、摩耶さん達の護衛をお頼みします！」
金剛「ＯＫ!!お姉さんに任せなサーイ!!」
比叡「気合い！入れて！守ります!!」
霧島「榛名は、浜風さんを曳航！」

榛名「はい♪」
霧島「一航戦　二航戦の皆さんは、索敵をお願いします」
赤城「ええ！お任せ下さい！」
加賀「了解しました」
蒼龍＆飛龍「了解!!」
摩耶「・・・すまねぇ。頼んだぜ、皆」
霧島「ええ！頼まれました！さぁ・・・」
霧島は、一呼吸おいて・・・高らかに号令を発した。
霧島「作戦終了!!これより鎮守府に帰還します!!・・・帰りましょう！・・・私達の家に!!」
一同「―了解!!!―」
霧島の号令と共に、艦隊が帰路に着く。一人も欠けることも無く・・・。

――アマギ鎮守府――
長門「・・・そうか、分かった。では、帰りを待っているぞ」
そう言うと長門は、無線機を置いた。それを見ていたキリヤマは、
キリヤマ「・・・・・」
長門「・・蒼龍より。作戦は成功。中破、大破した者もいるが、全員無事だそうだ」
それを聞いたキリヤマは、ふーっと息を吐いて、座っていた椅子の背もたれに身を任した。
長門「お疲れ様だな。提督」
キリヤマ「あぁ、お前もな。長門」
長門がフッと笑った。
長門「今回は流石に肝が冷えたってところか？」
キリヤマ「次から無線機の性能も考えなくては・・・、こんな事はもう二度とゴメンだ」
長門「・・・・・」

キリヤマ「ん？　どうした？」
長門「・・・摩耶達の救援の際、霧島達は正体不明の生命体と接触したらしい」
キリヤマ「生命体？」
長門「・・・全身が赤く染まった人型、性別は恐らく男、こちらに対し協力的らしい。その力量は深海棲艦を圧倒する程で、共に深海棲艦を撃破した後、ものすごい速さで空へ飛びたったらしい」
キリヤマ「・・・赤い男・・・戦士か・・・」
長門「・・・提督・・・」
キリヤマ「あぁ・・・、貸しができたみたいだ」
長門「・・・正体不明の赤い戦士にか？」
キリヤマ「・・・それもデッカイ貸しがな・・・」
キリヤマはそう言うと、窓の外を眺めた。その先には沈みかけの夕陽に照らされる正門と小さな建物があった。
艦娘達とはまた違う、もう一人の功労者の帰りを、キリヤマは黙って待つのである。
―アマギ鎮守府　　正門―
長門やキリヤマが艦隊の帰還を待ち望んでいる中、正門の受付の中にも、ある人物の帰りを待ち続ける者がいた。
山城「・・・・・あ～～・・・暇だわ・・・」
警備員のナガト　リョウに仕事を押し付けられた戦艦　山城である。
山城「てかっ!?いい加減遅すぎでしょ!?いつまで巡回しているのよ！あの人は!?」
押し付けられた仕事だが放り出す訳もいかず、何とかこなしている内に夕方になっていた。
山城「電話しても出てくれないし、提督と長門さんは手が離せないし・・・もう！」
山城は椅子から立ち上がって外に出た。気分転換をするためだ。
山城「ん～～!!」
背伸びをして座りっぱなしでコリ固まった体をほぐす。仕事をこ

なした後だから、これがなかなか気持ちがいい。
山城（・・・・・まぁ一時は、どうしようかって思ってたけど・・・こなせば、なかなか楽しいのよねぇ・・・ここ）
先程まで散々文句を言っていた山城だが、思いの外この仕事を気に入っていた。
山城（訪ねてくる人も、普通にイイ人達だし、何か遭っても、あの人が作ってるマニュアルで動けば、殆ど大丈夫だし・・・てか、良く出来てるなぁ、あのマニュアル）
ナガトが、仕事の要領を事細かに書き記したマニュアルを作っていたお陰で、山城は何の苦もせず、夕方まで仕事をこなしてこれたのだ。
山城（艦娘の私でもこれだけ出来てるし・・・）
背伸びをした山城は腰に手をあて、
山城「もう艦娘なんか辞めて、警備員として雇って貰おうかなー！・・・な～んちゃって・・・ふふ♪」
???「や、山城・・・」
ふと、呼びれた方へ振り向くと・・・、
山城「扶桑姉様！」
山城の姉妹艦、扶桑型1番艦　扶桑の姿があった。
山城「姉様・・・！もしかして・・・私を迎えに来てくださ「ごめんなさい!!」・・・え？」
扶桑「・・・私が・・・私が不甲斐ないばっかりに、貴女に苦労ばかり掛けさせて・・・ごめんなさい・・・」
扶桑は、山城に対し、いきなり謝罪を述べ始める。その顔は暗く、涙目になっている。
対する山城は、何で姉の扶桑が泣きながら自分に謝っているのか、全く理解出来ずにいた。
山城「ね・・・姉様？わ・・・私、今の状況がよく呑み込めな・・・「いいの！それ以上言わなくても・・・！わかっているわ・・・」お、ｏｈ・・・」
扶桑「私が戦艦として欠陥が多く、前線に行く事があまり無いのは事実・・・」

山城「いや、欠陥については、私も同じ・・・「いいの・・・・！いいの！山城！わかっているわ・・・・！」お、ｏｈ・・・」
扶桑「・・・前線に出ても、速度と装甲の無さに、大破を繰り返し、ドッグに入り浸り、タンスの肥やしならぬドッグの肥やしとなり・・・」
山城「・・・若干それ、姉様じゃなく私の事言ってませんか？姉さ・・・「いいの・・・・！いいの！山城・・・・！そんなに自分自身を傷付けないで・・・」やっぱ言ってるじゃないですか～!?」
扶桑「だから・・・、好きなってしまったのでしょ・・・山城？」
山城「い、いやいやいやいや!?何を言っているんですか!?私はあんな仕事押し付けるヤツなんて!?好きになるはずないじゃないですか!?・・・わ、私が好きなのは・・・扶そ・・・「警備員と言う仕事を!!」・・・へ？」
山城は理解出来なかった。
山城（何？警備員？何で？私がいつ警備員をやりたいって・・・あ・・・）
どうやら扶桑は、山城の独り言を聞いて変に解釈してしまったらしい。勿論、山城は冗談として言っていただけで、本気で警備員になろうとは思っていない。
聞いた内容とタイミングが悪かった。扶桑は完全に勘違いしていた。
山城「ち、違うの！違うの！姉様！あれは、ちょっとした冗談で・・・」
扶桑「いいの・・・もういいのよ・・・山城・・・艦娘辞めたくなるほど・・・辛かったのね・・・！ごめんなさい山城・・・気付いてあげれなくて・・・」
扶桑は、困惑する山城に背を向け、
扶桑「・・・貴女が警備員になっても・・・私は・・・忘れないから・・・！」
山城「ち、ちょ!?ちょっと扶桑姉さｍ「さようなら山城!!元気でいるのよ！」お、ｏｈ」
扶桑は走り去った。風の様に去って行く扶桑を、山城はただ見ているだけ。

山城「・・・・・・・ふ・・・・ふ・・・・」
実質、扶桑に見限られ・・・、どうしようもなくなった山城は、
山城「・・・・・・不幸だわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ―
―・・・!!!!!!」
そう沈むゆく夕日に向かって、叫ぶのだった。

ナガト「・・・・・や~れやれ・・・・一仕事して戻って来たら、エライ目に遇った・・・」
―アマギ鎮守府　正門　夜―
ブツブツと小言を言いながら守衛室に戻って来た。
少し前、ナガトは、守衛室に帰った。
だが守衛室の中では、まるでこの世の終わりと言う様な顔をしている山城が、守衛室の机に突っ伏していた。
ナガトが声をかける。すると、山城はナガトの顔を見た瞬間、自身の艤装を展開し、恐ろしい形相で襲いかかった。
山城「オ、オ、オ、オノレェ、ナガト??!!!!ι(`ロ´)ノ」ガチャコーン!!!
ナガト「!?待て待て待てぇ!?!?(。ロ。;ノ)ノ」
ナガトは、鬼の様な形相で襲いかかってくる山城を必死に止めた。
そして山城から罵詈雑言を浴びせられ、そして扶桑の部屋を訪ねて何とか誤解を説いた頃には、空は満天の星空に変わっていた。
ナガト「って言うか・・・ここまで凄く長かったな・・・リアルに」
ナガトは、一体なんの事を言っているのだろうか。
意味のわからない事を言いながら守衛室に向かうと、何故か誰もいないはずの守衛室に明かりが点いている。
不思議に思うナガト、さらに明かりの点いた守衛室の中から、複数人の声が聞こえてきた。
ナガトは、恐る恐る守衛の扉を開けると・・・、
時雨「・・・あ、やぁ警備員さん。お帰り」
村雨「お帰りなさ~い♪」

白露「これでぇ・・・・上がり!!イエーイ!!!いっちぼ～ん!!!」
夕立「あ～!白露姉!ウノ!!って言ってないっぽい!!ノーカン!ノーカ～ン♪」
白露「えええ!?イ、イヤ!アタシ言って・・・あ～!!ヤっちまった～!!!」
守衛室のちゃぶ台を囲んでＵＮＯをやっている白露型姉妹達と・・・、
雪風「はい!!上がりです!」
白露「な、何い!?また1位だとぉ!?」
摩耶「はっはー（笑）またやられたな（笑）」
白露型姉妹に混ざってＵＮＯをやる雪風と、受付の椅子に座ってチャチャをいれる摩耶がいた。
白露「クッソー!!!!」
時雨「あっ僕も上がりだね」
白露「時雨ぇ!?」
村雨「はいは～い♪私も上がり♪」
白露「村雨もぉ!?」
夕立「アタシも上がりっぽ～い♪」
白露「夕立ぃ!?お前もかぁ～!?ってアンタ達!ウノって言ってないじゃん!?」
全員「「言いました～♪（っぽい♪）」」
白露「クゥウソォオ!!・・・もう一回!!もう一回やろ!!」
夕立「えぇ～、もう飽きたっぽい・・・」
時雨「まぁ・・・、確かにちょっと飽きてきたかなぁ・・・」
村雨「もう１０回以上やったからねぇ・・・」
摩耶「その全て1位が雪風だからな・・・(笑)」
白露「えぇ～!?・・・じゃ!じゃあトランプやろ!!トランプ!!ババ抜きで勝負よ!!」
村雨「もう・・・本当に負けず嫌いなんだから・・・」
夕立「もう、負けず嫌いだけは1番っぽ～い」
白露「えぇ～!!ヤダ!!負けず嫌いじゃなくて、本当の1番になりた

いの～!!」
そう言いながら白露は駄々をこね始めた。
浜風「・・・白露さん、もうゲームは終わりです。警備さんが困ってるじゃないですか。あ、お疲れ様です。どうぞ」
守衛室の奥から出てきた浜風が、お茶の入った湯呑みをナガトに手渡しながら言う。
白露「えぇ～・・・、じゃあ!警備員さんも一緒にやろうよ!!皆でやった方が楽しいよ!絶対!!」
浜風「・・・白露さん?」
白露「えっ・・・あ、はい・・・(・・ω・、)」
ナガト「お、ありがとうな。・・・俺の事は別に気にしないでくれよ。俺の方は、もう仕事はないからな」
浜風「えっ?・・・ですが、ずっと占領している訳には・・・」
ナガト「良いって良いって、賑やかなのも、たまには良いさ。気にせずやってくれ」
白露「イエーイ!!(≧▽≦)さっすが警備員さ～ん!!話がわっかる～!!」
ナガト「ただし!明日に支障がでない程にな?お互いの為にな?」
白露「は～い!分かってまーす!よっしゃ～!!リベンジマッチだぜぃ!!」
ナガトの許可を得て、嬉々としてゲームを再開する白露。その姿に他の者達はハァ・・・、呆れてため息をもらす。
浜風「・・・すいません・・・ありがとうございます」
ナガト「良いって・・・それより、もう動いて大丈夫なのか?今日、大変だったんだろ・・・?」
浜風「えっ?あぁ、はい、大丈夫です。ちょっと危なかったですが・・・駆逐艦は治りが早いので・・・」
ナガト「・・・そうか?そりゃ何より・・・ズズ～・・・」
ナガトは、浜風の煎れたお茶をすする。すると摩耶が、
摩耶「・・・てか、何でお前、今日の事知ってんだ?」
1つの疑問を投げかけた

ナガト「えっ？・・・あぁ、提督に会ってね。扶桑姉妹の件の帰りに、そこで聞いたんだ」
摩耶「・・・へぇー、提督もお喋りだな・・・」
ナガト「・・・・摩耶ちゃんが泣いた事も・・・（ボソッ）」
摩耶「ぶっ!?!?ちょ!?ちょ、テメェ!!何で知ってんだよ!?マジで!?」
ナガト「 だから、提督に聞いたって・・「摩耶には頭が上がらん」ってさ・・・やるじゃん」
摩耶「うっせぇ!!・・・ったく、本当にお喋りだな・・・あの提督は、・・・・・・・クソが・・・（照）」
摩耶は頬を真っ赤にしながらボソボソと呟いた。そんな光景に、ナガトと浜風は微笑ましく思った。
浜風「・・・本当にありがとうございます。・・・摩耶さん、ちょっと今日の事で責任感じてたみたいなんです」
ナガト「そっか・・・そりゃ何より・・・ズズズ・・・」
そう言うと、ナガトは再びお茶をすする。
浜風「・・・・・・」
ナガト「・・・・？どした？」
浜風「あ、いや・・・何もお聞きにならないのですね・・・」
ナガト「？何を？」
浜風「・・・赤色の戦士の事です」
ナガト「・・・あ～、それねぇ・・・。なんだろうなぁ・・・そいつ」
浜風「空を自由に飛び、深海棲艦を圧倒する程の力を持つ赤色の戦士が、なぜ私達を助ける様な事をしたのでしょうか・・・」
ナガト「・・・その気になれば、自分達も殺す事が出来たかもしれないのに？」
浜風「・・・・・・」
ナガトの言葉に、浜風は黙りこんでしまう。一人思い詰めた表情の浜風を見て、
ナガト「・・・考え過ぎじゃないか？」
浜風「・・・えっ？」

ナガト「そいつが浜風達をどう思ってたかなんて誰も分かんねぇ。そいつが味方になって戦ってくれた。そして浜風達は無事戻って来た。それで万々歳じゃないか？」
浜風「・・・ですが！あの赤色の戦士が、この先味方として戦ってくれるとは限らない・・・。いつか私達に牙を向けてきたっておかしくは・・・！」
そう語る浜風の表情は、不安に満ちていた。それを見たナガトは、思わず天井を見上げる。
ナガト「そうかぁ・・・。やっぱそう思うよなぁ・・・」
浜風「・・・？・・・ナガトさん？」
ナガト「・・・だから、そうならない為にも自分達がやらなきゃならない事・・・あるんじゃないか？
」
浜風「・・・やらなきゃならない事？」
ナガト「・・・・そんな奴に頼らなくなるくらい強くなるんだ。今回はその訳の分からない奴に助けられてしまったけど、元々君達は深海棲艦を退ける為にいるんだろ？油断しなければ深海棲艦に遅れを取る事はないさ」
浜風「・・・・・もっと強く・・・・・」
ナガト「まぁ、その赤色の戦士も、いくら強いからってピンチになるときが絶対あるはずだ。その時は逆に・・・」
浜風「・・・私達が助ける・・・？」
浜風がそう言うと、ナガトは静かに頷く。
ナガト「得体の知れない物を疑うのは間違っちゃいないが、まずは貰った借りを返す・・・っと、俺は思うよ」
浜風「・・・確かに一理あると思います・・・・・・ですが私は・・・！」
そう言葉を続けようとした、その時、
雪風「警備さ～ん!!（≧▽≦）」
ナガト「うぉ！どしたの、雪風ちゃん？トランプは？」
雪風「早く上がったので終わるの待ってます!!」

ナガト「えっ？早いねぇ・・・・あ」
ナガトがちゃぶ台の方に目を向けると、一枚のトランプを持って、ちゃぶ台に突っ伏している白露がいた。トランプの柄は・・・ジョーカー。
ナガト（ドンマイ、白露・・・）
雪風「ねぇねぇ！警備さん!!どうかしましたか？」
ナガト「えっ？あぁ、ごめんね。それでどした？」
雪風「はい！聞いて下さい！今日ですね！とんでもない人に出会ったんです！」
ナガト「・・・あぁ、例の赤色の戦士の事かい？」
雪風「そうなんです！赤い人はとても強かったんです！颯爽と空から飛んで来て・・・深海棲艦の砲撃を跳ね返し・・・パンチとキックで軽巡ツ級を圧倒してました!!」
自分が、まるで有名人にでも会ったかの様に自慢気に話す雪風。とても楽しそうだ。
雪風「そして最後のトドメは・・・・・ビイイイイイイイイム!!」ビシィ!!
赤色の戦士の真似なのか、両手を交差してポーズした。
ナガト「おぉ～」パチパチパチパチ
雪風「えへへ♪」ニコォ
ナガトの拍手に、誇らしげに笑う雪風。
ナガト「へぇ～、そんな奴がいるんだな（笑）」
雪風「はい！それは、もう・・・・・格好よかったぁ!!」
満面の笑みで、その時の出来事を思い浮かべていた。しかし、浜風は冷静に雪風を諭す。
浜風「・・だが、あの赤色の戦士が、まだ味方と決まったわけじゃない・・・。もしもの事を考えたら・・・・一切油断する事はない様に・・・」
その言葉に、雪風はムッとした顔をする。
雪風「むぅ・・・、浜風は警戒し過ぎです！雪風には分かります！あの人は、私達の味方です！」

浜風「どうして分かるんだ？あの赤色の戦士が私達の味方だと言う証拠なんて、どこにもない！」
雪風「証拠ならあります!!あの人は私の頭を、優～しく撫でてくれました!!あんな優しい撫で方をする人が、私達の敵な訳ないです!!」
浜風「そ、そんなことが証拠になる訳ないでしょう!?いい加減にして!!」
雪風「むむ～ぅ！そんなことって何ですか!!・・・・・大体、浜風は頭が堅すぎです!!そんなんじゃあ・・・オッパイまでカチンコチンになりますよ!!」
浜風「なっ!?・・・む、胸は関係ないでしょう!!??」
なにやら二人が赤色の戦士の話から脱線し始めてきた。すると・・・、
ナガト「あ～、お前達。今回はそのくらいに・・・」
時雨「あの～・・・ちょっと良いかな？」
夕立「ぽいぽ～い？」
言い争う雪風と浜風の間に時雨と夕立が割って入る。
時雨「言い争ってるところ悪いけど、ちょっと気になった事があってね」
夕立「夕立もすごく気になる事があるっぽい！」
ナガト「おお、どうかしたのか？」
ナガトは、とっさに話題を時雨と夕立へと変える。
時雨「うん、さっきから黙って聞いていたんだけど、赤い戦士や赤色の戦士とか・・・・・」
夕立「提督さんや長門さんも、未確認生命体とか赤い男とか言ってるぽいけど・・・」
・・・ナガトは、二人が言いたい事が読めた。
ナガト「・・・あ～、名前？」
時雨「そう、何かもっと・・・こう・・・しっくりくる様な名前が無いのかな？」
夕立「ぽいぽ～い！良い名前が無かったら皆で付けてあげたいっぽ～い！」

雪風「!!!、賛成！賛成！大賛成です!!雪風も考えます!!」
雪風と夕立は手を合わせてはしゃぎ出す。
摩耶「ったく、まだ味方かもわかんねぇ奴に名前かよ」
雪風「え～！良いじゃないですか～！むぅ～！」
夕立「むぅ～！」
村雨「良いんじゃない？なんか面白そう！」
浜風「本来は、提督と長門秘書艦が決めるんですが・・・考えるくらいなら・・・」
摩耶「・・・んで？どんなのにするんだ？」
白露「はい！はい！はーい!!」
先ほどまでちゃぶ台に突っ伏していた白露が、急に手をあげる。
雪風「はい！白露ちゃん!!」
白露「よし!!いっちばーん!!ふふふ、白露型一番艦のセンスを魅せてあげるよ!!」
夕立「お～、頑張れ～っぽい！」
時雨「では、どうぞ。白露姉さん」
白露「・・・謎のベールに包まれた！正体不明の真紅の男!!その名は!!!」
カッコつけているのか、よく分からない動きをする。
一同「・・・ゴクリ」
白露「・・・レッドマーン!!!」デデーン
摩耶「・・・そのまんまじゃねえか！」
白露「え～、じゃあ摩耶さん考えて下さいよ～（・ε・、　）」ム～
摩耶「・・・そんなのアタシの柄じゃねえよ」
白露「え～、考えて下さいよ～（・ε・、　）」
摩耶「うーるさい、・・・他は無いのか？」
村雨「じゃあ、はい♪」
村雨が手をあげる。
雪風「はい！村雨ちゃん!!」
村雨「んー、謎の赤色の戦士だから・・・ミステリー・ザ・レッドマン！」

摩耶「・・・お、それ良いな」
白露「イヤイヤイヤイヤ!?そのまんまじゃん!?てか、私の言った奴にミステリー付けてるだけじゃん!?」
摩耶「・・・・・・」ジー
白露「え、何？私もしかして嫌われてる・・・？（；ω；）」クスン
摩耶「・・・冗談だよ。そんな悲しい顔すんな」
夕立「ぽいぽ～い！」
次は夕立が手を挙げた。
雪風「はい！夕立ちゃん!!」
夕立「ぽい！その赤い戦士さんは、すっごく強かったんだよね？じゃあスーパーレッドマンで！」
白露「だーかーらー！私のレッドマンに付け足してるだけじゃーん！だったらレッドマンでいいよね!?レッドマンで!?」
ちゃぶ台をバンバンと叩きながら抗議する白露。すると摩耶が呆れながら口をはさむ。
摩耶「ったく、お前らレッドマンしか出てこないのか？もうちょっと捻ってみろよ？」
夕立「む～！だったら摩耶さんも名前考えて下さいよ～（・、ε・・）」
村雨「そーよねー、柄じゃないって言わずに考えて下さいよ～（・ε・、　）」
白露「そーだ！そーだ！きたないぞー！（、Δ、）」
摩耶「だから、何でアタシが・・・」
摩耶が反論しようとするが・・・、
白露　村雨　夕立「・・・・・・」ジー
無言の圧力。反論出来そうにない摩耶は、
摩耶「・・・ったく、考えりゃいいんだろ？考えりゃあ？」
白露　村雨　夕立「・・・・・・」ニコォ・・・
折れて考え始める。白露達は満足そうに頷いた。
摩耶「んー・・・・・・」

赤い戦士の名を考える摩耶。その顔は真剣そのものだった。
白露「お～お～、摩耶さん、すっごく考えてますねぇ♪村雨さん♪」
村雨「は～い♪これは凄～く期待できますねぇ♪ねぇ夕立ちゃん♪」
夕立「ぽ～い♪ウフフ～♪」
煽る3人に摩耶は気にせず考え続ける。そして、
摩耶「・・・！・・・よしっ！出来たぞ！〝セブン〟・・・でどうだ？」
白露　村雨　夕立「・・・・・・セブン??」（？ロ？）
ナガト（・・・・お？）
名前にポカンとした表情になる3人。他の者も頭の上に？が浮かぶ。
浜風「ま、摩耶さん？何で・・・」
摩耶「セブンって名前が出てきたってか？分かってるよ。実はな？」
受付の椅子で足を組み直しながら、摩耶は語り始める。
摩耶「今回の件のより前に、えらい騒ぎになった事件があったのは、知っているよな？」
白露「ん～？何か合ったっけ？」
時雨「・・・あぁ、七夕だね？」
摩耶「そうだ。7月7日、七夕の夜、深海棲艦から輸送船を救援する任務中、出現したって言う〝巨人〟な」
白露「あっ！思い出した！新聞とかにも出てたよね？」
摩耶「あぁ、それを世間は、海の神の目覚めだ、極秘開発中のロボットの暴走だ、はたまた宇宙人の襲来とか言ってるだが、アタシはあの巨人と赤い戦士は同じ奴じゃないかって思ってんだ」
白露「え～、まっさか～！その時出たのは、推定で５０ｍ届く程あったらしいのに、今回出たのは成人男性位だよぉ？大きさが全然違うじゃない！」
摩耶「まぁ、そうなんだけどよ？・・・・・・」
浜風「・・・そういえば、摩耶さんはあの時現場にいたんですよね

？」
摩耶「まぁな、アタシが現場に着いたときには、奴はデカい光になって空に逃げていったけどな」
浜風「空に・・・」
そう浜風は呟くと腕を組んで考え始めた。確かに空に飛び去るという2体の行動は良く似ているからだ。だが、第一大きさが違い過ぎる。片方は１８０㎝程、もう片方はおよそ５０ｍ。同一人物なら奴は体の大きさを自由に変えられるという事だ。それに空を飛ぶという事自体馬鹿げている。それも艦載機が追えない程速い。
体の大きさを変えて、空を飛び、深海棲艦を素手で渡り合い、トドメには殺傷能力の高いトサカと光線を放ち圧倒する。
浜風は身震いした。
浜風「・・・・・これがいわゆる〝チート〟ですか・・・・」ボソッすると、突然雪風が「アッ！」と叫んだ。
雪風「あ、そっか！だから〝セブン〟なんですね！」
白露「・・・どゆこと？（。ω。）？」
まだ意味が分かっていない白露。
時雨と村雨はポンッと白露の肩に手をのせる。
時雨「要は、七夕の日だからだよ？」
村雨「そういう事ですよぉ？7月7日だから〝セブン〟～。もう分かるよね？」
白露「う～・・・、分かってますぅ～！惚けて見ただけですぅ～！」
プク～ッと頬膨らまし抗議する白露。
その顔が面白いのか、時雨たちはケタケタ笑った。
摩耶「じゃあ、名前はセブンで決まりか？」
白露「ちょっと待った～！」
摩耶「・・・んなんだよ！白露!!皆しっくりきてたじゃねえか！」
白露「・・・まだだ！まだ終わらんよ!!」
時雨「・・・姉さんはそれが言いたいだけじゃないのかい」
白露「聞いて！お願いだから聞いて！
」

摩耶「・・・なんだよ？」
白露「じゃあじゃあ！みんなの意見を全部集めて〝ミステリー・ザ・スーパーレッドセブン〟で・・・」
摩耶　村雨　時雨　夕立　浜風　雪風「「「「「長い!!!」」」」」
白露「辛辣!!」
ナガト「ハハハ・・・」
村雨「そもそもミステリー・ザって付けるって結構イタいわよね～」
夕立「それにスーパーレッドマンって、なんかありきたりだからあんまり好きじゃないっぽい!!」
白露「自分で付けてたよね!?私のパクって付けてたよね!?」
村雨　夕立「・・・・・」「（，～、）「
白露「おのれぇぇぇぇぇ!!」
時雨「赤い人でレッドマンっていうのも結構イタくないかい？白露姉さん」
白露「ほんげぇ!?」
摩耶「・・・じゃあレッドマン路線はボツな？」
白露「む、無慈悲!!」
白露は胸を押さえながら、再び机の上に突っ伏した。
雪風「だけど、セブンだけだと、ちょっと物足りない感じがします！」
摩耶「お？ここに来てまた新しい案か？」
時雨「確かにセブンは良いけど、ただの数字だからね。何か足してみようか？」
するとある者が、ゆっくりと震える手を挙げ
白露「・・・じゃ・・・じゃあ・・・」
己が爪痕を残す為、最後の力を振り絞り、手を挙げる白露だったが、
摩耶「お前はもう休め」
白露「む、無念・・・」バタッ
摩耶に阻まれ、力尽きた白露。それを見た周りの者は苦笑するしかなかった。
ナガト「・・・なぁ、ちょっと良いか？」

摩耶「ん？なんだよ警備さんよ？良い案があるのか？」
ナガト「何か足すんだろ？だったら・・・〝ウルトラセブン〟ってのはどうだろう？」
摩耶「ウルトラセブン？」
ナガト「そう、空を飛び、砲弾を跳ね返し、素手で深海の奴らを圧倒し、おまけにビームも出せる。〝ウルトラセブン〟・・・どうかな？」
摩耶「ウルトラセブン・・・」
村雨「ウルトラの意味・・・超越（ちょうえつ）だそうよ？」
浜風「超越した存在・・・ウルトラセブン・・・確かに、あの赤い戦士にぴったりですね」
雪風「ウルトラセブン・・・ウルトラセブン！はい！すごく良いです！すごく格好いいと思います！」
摩耶「アタシも文句はねぇな。良い名前だと思う」
時雨「じゃあ決まりかな？」
夕立「ぽーい!!ウルトラセブン！ウルトラセブン!!」
皆の答えがまとまった。すると突然白露がガバッと立ちあがり叫んだ。
白露「はい!!!決まりました～！赤い戦士の名はウルトラセブンで～す!!!」
摩耶「あ、良い所だけ持って行きやがった」
白露「ふっふっふ～！白露型一番艦白露!!倒れても只では起きませんよ～？」
時雨　村雨　夕立「「「調子に乗るな！（ぽい！）」」」ペシッ
白露「あいたっ！」
守衛室は笑いに包まれた。どうやら名前はウルトラセブンに決まりの様だ。
異なる時空、異なる宇宙、異なる地球、それでもまた〝ウルトラセブン〟と呼ばれるとは、これもまた運命なのだろうか。
己が知らない世界に降り立った深紅の戦士〝ウルトラセブン〟、何故ここに降り立ったのか、これから何が待ち受けているのか、〝ウル

トラセブン〟ことナガト・リョウはまだ知らない。
物語は、まだ始まったばかりである。

―――――――――――――――――
???
―――――――――――――――――

???「ツ級が殺られたらしい」
頭に2本の角を生やした者が言った。
???「・・・へぇー、別にいいじゃん、腕っぷしが強いだけの脳筋野郎でしょ～？いらないいらない（笑）」
???「私も同意見だ。奴は勝手に出撃して勝手に死んだだけ。嘆く価値も無い」
フードを被った者がキシシっと笑い、黒髪の長い者は興味が無いと言い捨てた。
???「うわぁ辛辣だね～（笑）」
???「貴方も大差無いと思うが？」
???「そうだそうだ～」
???「変わんねえぞ～」
フードと黒長髪が言い合うと黒長髪の背後から双子が出てきた。
???「ああん？」
???「「ひいぃ」」ササッ
だがフードが威圧すると双子は黒長髪の背後に隠れた。
???「だが、ツ級はあれでも、かなり手練だ、簡単に死ぬ事があるのか？」
また違う長髪が意見を述べる。白髪だった。
???「・・・実は、この件は少々厄介なことが起きたらしい」
???「厄介な事？」
???「そうだ。生き残りの駆逐艦2隻の話だと、実はツ級はかなりの所まで艦娘共を追い詰めたらしい。だが、そこへ邪魔が入り、その邪

魔者に殺られたそうだ」
???「邪魔者に・・・、背後からの奇襲か？なら、戦艦か空母かはたまた潜水艦か・・・」
???「いや、どれでもない」
「・・・何？では、どんな艦娘が来たのだ？」
「艦娘でもない」
「？どういう事だ!?」
「深紅の戦士だと言っていた」
「深紅の・・・戦士だと？」
「その者がツ級を亡き者にした。駆逐艦たちはそう言っていた」
「・・・ふ・・・ふふふ・・・ふはははは!!!」
「？」
「面白い!!実に面白いぞ!!!はははははは!!!」
「・・・・・」
「で、その深紅の戦士が現れたと言う座標は何処だ？」
「・・・知ってどうする？」
???「無論!!手合わせしに行く!!ツ級を倒したと言うその力量を計りに行くのだ！」
???「そ～れ～は～ちょっと待ってくれない？」
「!!」
白長髪の横からフードがスッと顔を出す。
???「なんだ？お主も深紅の戦士と一戦交えたいのか？」
「そう言う事♪だからさ・・・邪魔しないでよ？」
???「そればかりは、応じれんな・・・！」
血気盛んな白長髪とフードの間で殺気がぶつかり合う。それを見ていた2本角は、ため息をはく。そして黒長髪に視線を送る。
???「お前は興味ないのか？」
「私は興味がないと言えば、嘘になる。だが深紅とやらが現れた場所に行っても再び現れるとは思えないが・・・」
黒長髪は至って冷静。
???「そうだな、私もそう思う」

???「じゃあどうする？」
???「どうするどうする～？」
???「どうすんのさ～？」
いつの間にか、黒長髪の背後に双子がいる。２本角は手に顎を乗せ考えた。答えは直ぐに出た。
???「・・・今は情報が少ない。現れた座標から周りを潰していくしかないな・・・・・海図を」
???「・・・どうぞ」
２本角が海図を要求すると、何処からか、別の人影が海図を持って来るとそれを広げた。大きな帽子をかぶった者だ。黒長髪と双子が海図を覗く。白長髪とフードも殺気を解いて海図を見やる。
???「・・・現れた座標をここ、ここより周囲を探索し、新たに情報を手に入れる。今の段階は情報収集に重きをおけ。沈めるのはその後だ」
???「・・・了解した。だが・・・」
???「どうした？」
???「周囲を探索するに邪魔な建物がある」
すると、黒長髪がとある場所に指を指す。
???「・・・ここか・・・」
???「そうだ、探索の最中に奴らが邪魔して来ないとは限らん・・・・故に、いち早く潰しておこう」
???「・・・出来るのか？」
???「・・・ふっ・・・私に考えがある」
???「名案？名案？」
???「はたまた迷案かな～？」
双子が背後で茶化すが、黒長髪本人は気にも止めていない。
???「・・・貴様達も来るんだぞ？」
???「え～やだ～」
???「職権乱用だ～」
双子のブーイングにやはり気にも止めていない黒長髪。
???「では、準備する故、これにて・・・」

黒長髪は踵を返しその場から消えた。双子も付いて行ったのだろう、いつの間にか消えていた。
そして、少しばかりの静寂・・・、口を開いたのは白長髪だった。
???「邪魔な建物とは、やはり・・・」
???「・・・鎮守府だ」
???「大丈夫か？あそこは少々の事をやっても堕ちんと思うが？」
???「・・・何か知っているのか？」
???「な～に、昔に少し・・・な・・・」
懐かしさでもあったのか、白長髪は、ふっと鼻で笑うとその場から消える。
???「え～!?帰っちゃったよ！あの白頭！ん～じゃあもういいや！じゃね～♪」
相手がいなくなったフードは、２本角に手を振りながら消えてしまった。思えば海図を持って来た、大きな帽子をかぶった者も、いつの間にか消え、その場にいるのは２本角のみ。
???「・・・・・」
２本角は、海図に再び視線を落とした。
元々この海図は、この者達の物ではない。人間の船を沈めた際、手に入った海図なのだ。
その海図に自身で手を加え、今の形になったのだ。そんな海図を愛でる様に指でなぞる。
すると、ある場所で指が止まる。
???「・・・・・」
そこは黒長髪が邪魔だと言っていた場所、
そこは白長髪が昔の出来事に関係する場所、
そこは深紅の戦士が現れた座標に最も近い場所、
その場所について海図には文字が書かれていた。少しばかり古い海図は、所々にじんで読めない場所あるが、その場所だけは、存在を訴える様に、綺麗な文字のままだった。
２本角は、その綺麗な文字をなぞる。最初は何が書いているか解らなかったが、長年に渡り少しずつ解読してやっと理解する事が出来

た。

その場所は、こう書かれていた。

???「・・・・・アマギ・・・・・鎮守府・・・・・・」

続く？